

昭和地震誌  
倉本為一郎編著  
南輪内村震災記念

序

『災害は忘れた頃に来る』とは故寺田虎彦博士の名言である。

過去の災害を忘却すれば、将来再び災害を繰り返す結果となる。

子孫をして過去の災害を記憶せしめる、一つの方法として、記念碑の建設がある。

併し紀伊半島の如き多雨多湿の地に於ては、速やかに風化して判読さへ不可能の状態となる恐れなしとしない。現に？木浦光明寺に存する碑の如きは、辛うじて其の半ばを判読し得るに過ぎる。

過去の災害を記憶せしめる、よりよき、おそらくは最良の方法は、記念碑の編纂であらう。紀州には古来かかる篤志家が少なかつた。尾鷲の小河喜兵衛氏、新鹿の坪田氏、北牟婁の若林多中氏をはじめ、毛綿屋平兵衛、山下竹三郎、水島七郎の諸氏等々、枚挙に暇なき程である。此等の人々は、いづれも優れたる災害記録を後世に残し、一は郷土の防災に貢献すると共に、他方には時分の如き地震の研究者を裨益すること多大なるものがある。

本書の編集者倉本為一は、多年郷土史の研究に従事し、学殖極めて豊富なる上に、熱誠無比、加ふるに文筆に長ずる。君が本書の編集を企図せられたるは、誠に以って其の人を得たりと云ふべきである。

稿成り之を予に示されたので、早速一読するに、記事頗る詳細にして正確のみならず古来の震浪災より災害時の心得に至るまで、洩らす所無く記述せられ、誠にこの種の記念碑の範とするに足りると思はれる。

東南海地震に際し、紀州沿岸の被害甚大なりしは実に悲しむべき事であったが、君が郷土愛の結晶とも云ふべき本書によつて、この地が将来震浪災を免れるやうになれば、不幸なる犠牲者も以って瞑することが出来るであらう。

求められるがままに、蕪辞を連ねて以って序に代へる次第である。

昭和廿四年 晩秋 東都吉祥時の寓居に於いて

武者金吉職

## 目 次

序	
編 者 序	3
一、東南海地震概況	4
A 昭和十九年十二月七日東南海地震	4
B 昭和二十一年十二月二十一日南海道地震	5
二、紀州に被害を生じた地震・津波	
三、輪内を襲った昭和地震と津波	8
A 震災浪禍の実相	8
B 浪 高 地 凶	13
C 罹 災 状 況	13
D 遭 難 死 者	23
E 九 死 一 生	25
四、救 助 事 情	26
A 村の救急措置	26
B 災害救済復興協議会	27
C 団 体 の 活 動	27
D 同 情 救 恤	28
E 復 旧 へ 急 ぐ	28
F 合 同 葬 儀	29
G 救 助 美 談	30
五、震災記念事業	31
A 遭難死者追悼法要	32
B 講 演	32
C 体験発表座談会	33
D 地震資料展示	33
E 浪 高 調 査	33
F 記 念 碑 建 設	33
六、旧 記 輯 録	
A 熊野年代記	33
B 反 古 の 綴	33
C 坪田氏地震記録	34
D 安政元年海嘯事蹟	35
E 地 震 聚 報	40
F 其他の古文書	41

七、講演集	41
紀州と地震（武者金吉先生述）	41
A 大規模地震の発生地	41
B 紀州に被害を生じた地震	43
C 地震及津波の災害軽減法	46
D 災害時の心得	57
八、結び	59

## 編者序

東京都向島寺島町一丁目 吉岡医療製作所の事務室へ、自分に宛てた速達便の端書が投げ込まれた。発信は自宅である、曰く——七ヒジシンツナミカタウチリウシツソネカジカブジ——と書いてある。此の一片の端書が、私には不審で堪らない、其れ程の災禍を報らせるのに、何ぞ電報を打たないのか、発信日附を見ると十四日となつてゐる、斯んな急を要する通信を一週間も遅らすとは更に疑問の種である。折角手紙を出すなら電文など書かず、もつと詳しく知らせて寄こせばよい筈、然も——カタウチリウシツとあるが、あれほど奥の方にある自分の家が流れたとすれば、村の大半は流失したに違ひない、<sup>べらぼう</sup> 飽棒な！そんな筈はあるまい、其の證<sup>?</sup>に——ソネカジカブジ——と書いてあるではないか、賀田が大半流されたとしたら、曾根も無事では済むまい、電車の中で空想を描きながら、長男長生の宅（西多<sup>フツサ</sup>郡福生町熊川）へと急いだ。

長男は賀田の自宅が流失したのだと主張するが、私には何うしても合点が行かない、前の家は古いし小さいから流れたにしても、裏の本宅は堅牢な上に、五六十センチも高く、二階建てであるから、其程迄にも浪が寄せるはずがない、カタウチリウシツとは、賀田で家屋が僅かに流れたといふ意味であらう等と、善意に解釈もして見た。

兎に角家に帰らう……然し戦時中交通制限の為自由に切符を買ふ事が出来ぬ、幸い末子<sup>やすし</sup>太が横須賀海兵団を退団して、一旦鳥羽の商船学校へ帰ることになつてゐる、早速海兵団へ<sup>やすし</sup>太を訪問した、其の方は何とかして帰校に切符を求めよ、兎に角その切符を俺に寄こせ、一刻も猶予ならぬ場合だからと、無理に子供の切符を奪ふやうにして汽車に乗つた。

紀勢東線へ乗り換へると、震害浪災の様子が漸次判明してきた、三浦や尾鷲へ来ると生々しい惨状が眼前に展げられてゐる。賀田へ着いた、惨又惨！家も無ければ屋敷もない、岸から鉄砲州、六河谷、浜通りと、下の方は唯一面の荒磯である。涙も出なけりや言葉も出ない、榎本好文氏（次男悠紀生の嫁守野の父）宅へたどりついた、嫁は——お父さん、位牌も流してしまつて——と唯泣き崩れる計り、後は一同唯無言……

落ち着いてからの話で、疑問の手紙の謎は解けた、賀田郵便電信局は流失の災に遭つて、電報を打つ事も手紙を出すことも出来ない、長島へ救護米を積みに行く船に頼んで、電報を打って貰ふ事にした、然し長島局でも電報は扱はないといふ、然も其の人は四十幾通りかの打電報を頼まれてゐるので、之を一々手紙に書き換へる暇が無い、止むを得ず電文を

ハガキに写して出したと云ふ話である。

其れから丁度今年で四年目、其れ迄にも震災浪害の様様を記録して、後の世の人の為に残して置きたいと思つた事があつた、実は嘗て財団法人震災予防協会の武者金吉先生が、地震や津波に関する古記録採訪の為に幣宅を訪れ、自分の藏書中から良い資料を得たと、喜んで帰京せられた事があつた。昭和十九年の地震の後で、見舞い状を頂いた松尾に、——先年私共が調査にいったのは今度の地震を予期しての事でした云々——とあつた、私は其の時思ったが、地震は予知できるものか、古記録は参考資料として、それ程重要な役割を持つものであらうかと痛感したのである。

其の後、寺下憲一氏とも度々話合ひながら、荏苒日を過ごした事だが、機至つて今度地震誌編纂の事が実現することになり、私が其の事に当たることとなつたが、当時東都に在つて其の眞想を知らず、津浪に対する経験もないので、其の実況を記すことが不可能である。故に村中を廻つた、人々の実体験を聞いて歩いた、役場に行つて当時の書類を探查した、それ等を収録したのが此の冊子である。故に文に統一もなければ連絡もない、恰も浪で流失した物資が、一所へ溜つた様な感じがする、然し皆の体験記録であつて、空想でもなければ作り話でもない、見たままの実相である。後の世の人々が此の記録によつて、幾らかでも為になるならば、之に越した喜びはない、二十五の尊い遭難死者供養のために、此の一書を残しておく。

昭和二十三年十二月七日

藻の花の香り高き梶賀浦にて

倉本 為一浪 職

## 一. 東南海地震概況

### A. 昭和十九年十二月七日 東海地震

発信は十三時三十六分頃、震源は新宮沖の海底、北は仙台より南は九州宮崎に至るまで、此の地震を感じた、震害の最も大きかつたのは、静岡、愛知の両懸で、基地倒壊家屋を生じた府懸は、三重、岐阜、大阪、和歌山、滋賀、京都、兵庫、徳島、香川、山梨、長野、福井、石川で、規模が極めて大きな地震であつた。震央に近い熊野地方に於て、震害の殆どが無かつたといふ事は、堅い岩盤の上に位置してゐるが為であつて、唯新宮市だけが例外であつたといふのは同地の沖積層の厚さが、他の町村よりも厚いのが、原因の一つであつた事も事実であらう。

津浪は西は土佐の清水から、東は銚子に至るまでの海岸を襲つた、中でも熊野の海岸に於ては、浪高七米から十米位の所もあり、震害は絶無で、浪害が甚大であるといふ、皮肉な結果を生じた。此の地震で新宮は三十センチ、勝浦は四十五センチ、尾鷲は二十センチ、泊は二十センチ、新鹿三十センチ・九鬼は三十センチから五十センチ、松阪は四十センチメートルの沈下をした。

震害の甚だしかつたのは、地盤の軟弱な土地で、中でも人工埋立の土地に於いて、被害

が甚大であつた。引本は一米沈下したといふが、先年役場の地図を見て、埋立の部分が多いが、危ない事だといつた処、吏員等は地震や津波に対して楽観的で武者氏の警告に耳を籍さなかったが、今度初めて分かった事だろう。

#### B. 昭和二十一年十二月二十一日 南海道地震

四時十九分頃、潮岬南々西、約五十キロの海底に発生した地震であつて、十九年の地震よりは一層雄大な地震であつた。損害を被つた範囲は、一府二十四懸に亘つてゐる。

地震による被害は比較的少なく、災害は主として津浪に因るものであつたが、特に新宮市は全潰戸数二三九八戸、半潰約一千戸以上、市外の大半は焼失したが、被害統計は次の通りである。

全潰一一五〇六、半潰二一九七二、流失二一〇九、浸水三三〇九三、焼失二六〇二、船舶流失破損二九九一、死者一三六二、負傷二六三二、行衛不明一〇二である。

津浪は紀伊半島の西岸では、大体三乃至五米程度であるし、南端では五十センチから六十センチ隆起し、田辺では却つて沈下して居る。

### 二. 紀州に被害を生じた主なる大地震

#### A. 天武天皇十二年十月十四日 南海道地震

古書にあらはれた最初の南海道地震である、日本書記によると『山崩れ川湧き諸國郡の官舎及び百姓の倉屋寺塔神社破壊されたる類勝けて数ふべからず、是に因りて人民及び六畜多く死傷す、時に伊豫の温泉没して出ず、土佐の田苑五十余万頃没して海となる』と出ている、この地震に続いて沿海の地には津浪が襲来し、調物を運ぶ船が覆没したといふ事である。

此の日の夜伊豆島(大島ならん)が噴火を始め、多量の熔岩を流したようである。

#### B. 仁和三年七月三十日 南海道地震

津浪が海辺を襲ひ、特に摂津の海岸を襲つた処を見ると、震原は紀伊半島附近の海底であつたであらう。

#### C. 元禄元年七月三日 紀伊地震

千里ヶ浜隆起して二十余町陸地となつた。

#### D. 正平十五年十月四日 南海道沖地震

此の地震は紀伊國が最も強く感じた様である、翌五日の二十四時頃に再び強震があり六日の六時ごろ、尾鷲から兵庫に至るまでの沿岸に津波が打ち寄せて人馬の死んだもの其の数が知れない程であつた。

震源は熊野沖の海底であらう。

#### E. 正平十六年六月二十四日 南海道沖地震

此の地震は摂津、大和、紀伊、阿波、山城の國に震害があり、熊野の社頭の仮殿、其他悉く破壊して、湯の峯の温泉が止まってしまった。

沿岸の地では、津浪の襲ふ所となつたが、被害状況から見ると、震源は紀伊水道の南方

あたりかと思はれる。

#### F. 応永十四年十二月十四日の地震

此の地震は、紀伊國熊野及び伊勢地方が最も強く、津浪の襲来があり、本宮の温泉は八十日間湧出が止まった、震原は多分熊野灘であらう。

#### G. 明応七年八月二十五日 東海道沖地地震

之より先、延徳三年及明応元年に伊勢に強い地震があり、次で明応二年に渥美半島に強い地震が二回、更に明応七年四月五日に同半島で強い地震を感じた、之れ等は八月二十五日の大地震の、広い意味に於ける前震と云ふべきであらう。

紀伊の熊野では、本宮の社殿が倒潰するし、那智の坊舎は崩れ、湯の峯の温泉は十月八日まで、四十四日湧出が止まった。

津浪に襲はれた地域は、紀伊から房總にまで及んだようで、伊勢、志摩では約一万人溺死したといふ事である、就中伊勢の大湊では、流失家屋一千戸、溺死五千人に及んだそうである、震源は東海道の少々遠い沖合の海底であつただらうと推測せられる。

#### H. 永年七年八月八日の地震

この地震を強く感じたのは、河内、摂津兩國であつたが、海辺の地は津浪に襲はれた、震源は紀伊半島附近の海底であつたのだらう。

##### 1. 永正十七年三月七日の地震

震害を被つたのは紀伊國で、那智の如意輪堂は捩れ、浜の宮の寺、本宮の坊舎阿闍堂は倒潰するし、海岸には津浪が押し寄せて、民家の流失するものもあつた、震原は熊野灘であらう。

#### J. 慶長九年十二月十六日の地震

此の地震は古来有数の大地震で、故大森博士は、津浪の区域の広大なる事は我國地震史上稀に見る所であるといはれた如く、東は犬吠崎から西は九州南部に及んで、八丈島の如きも非常に浪害を被つた。

伊勢の浦々では、地震の後に先ず数町の沖まで汐が引き、次で津浪が襲来したといふ事である、標式的リアス式海岸である志戸熊野沿岸の浪災は、定めし甚大であつたと想像されるが、記録が悉く滅び去って、今は其の模様を詳細に知ることが出来ない、紀伊西岸の広村では、戸数一七〇〇戸の中七〇〇戸が流失してしまった。

#### K. 宝永元年の地震

紀伊の海岸一体に津浪が押し寄せて、三輪崎と太地で民家が三十戸流失した、此の津浪は地震津波か風津浪か明らかではないが、若し地震津浪ならば、震源は恐らく熊野灘の海底で、次の宝永四年の大地震の広義の前震であつたのである。

#### L. 宝永四年十月四日東海道沖及南海道沖大地震

慶長九年の大地震と同じやうに、東海道沖と南海道沖とから、殆ど同時に発生した巨大な双子地震で、両地震の時差は数分であつた事と推定せられる。

中でも震害の甚だしかったのは、東海道伊勢湾沿岸と、紀州半島である、紀伊半島の震度は田辺町の被害から推測する事が出来るが、此の地震に伴った津浪は、九州の東南部から、伊豆半島に至る沿岸の悉くを襲ふた計りでなく、一方は紀伊水道から侵入して、大阪湾及び播磨灘にも達してゐる。

紀伊の熊野も亦浪害が甚しく、中でも尾鷲の如きは千余人の死者を出した、此の地震の伴った著しい現象は、室戸半島、紀伊半島及遠江の東南部は、南上がりの傾勤を起こした事である。今村博士の調査によると、室戸崎附近は一、五米紀伊半島の南端串本では一、二米の隆起を見た。

此の地震の約一ヵ月後に、富士山が爆発して宝永火口を形成した。

#### M. 安政元年十一月四日 東海道沖地震

十一月四日九時頃。遠州灘東部の海底から発生したと推定される地震で、規模が頗る雄大であった、家屋の倒壊した範囲は、伊豆から駿、遠、参、尾の全部と、申、信、濃、勢、志の大部、近江の東半部を包含した三六〇〇〇軒平方に及ぶ範囲である。伊勢國の津及松阪附近も局部的に振動が激烈であった。

津浪は房總半島から、土佐の沿岸までを襲ひ、莫大な損害を被った。伊勢湾沿岸では、家屋、船舶の破壊流失、堤防の破損等大なる被害があつた。特に浪害の著しかったのは、伊豆下田と、志摩から紀伊國熊野にかけての沿岸であった。

志摩では流失家屋及び荒廢に帰した田畑は多く、死者も少なくなかつた。一、二の例を挙げると、甲賀村では浪高十米、鳥羽では比較的浪高が小さくて、五、六米だったらしく、村によっては十米から二十米位の所もあつたといふ事である。

古和浦では死人は少なかつたが、二五〇戸の中僅かに二〇戸程を残して、他は悉く流失してしまつた。熊野では長島は浪高五米から六米位、八百戸の中八十戸を残して他は流失するし、二木島、新鹿、大泊は熟れも八分通り流失した。

尾鷲は浪高六米位であつたらしいが、人口が多いのと、道路系統が複雑な為、一四人の死人を出した。先年実地について調査した所によると、遊木浦、二木島、甫母寺は、浪高最も大なりしものの如く熟れも十米位、二木島湾の奥の部分はそれよりも稍高かつた事と思はれる。

#### N. 安政元年十一月五日 南海道沖地震

十一月四日の大地震から約三十二時間を経て、五日十七時頃南海道沖から再び大地震が発生した。振動の強かつたのは、東は伊勢の周辺から、九州の東北端に至る間で、就中、土佐、阿波及び紀伊の南西部は、振動が頗る激烈であり、家屋の倒潰したものも甚だ多かつたのである。

此の地震に伴った津波は、恐らく房總半島から、九州の東岸に至るまでの間を襲ふたのであらうが、紀伊の西岸は非常な損害を蒙つた事と思はれる、紀州広村の浜口梧陵が、己の稲村に火を放つて村民を救つたのはこの津浪の時の事である。

紀州領の被害は、倒潰、流失、破損、焼失等によって、合計二六〇〇戸以上、同寺社七

ニ大小の船舶が流失したり、破損したものが一九九二隻、流死六人、怪我人三三人、荒廃に帰した田畑一六八〇〇〇石余り、紀州田辺藩の領分では、家屋の倒潰、流失、焼失合わせて一二二八戸、土蔵の焼失したもの二六四、死者二四であった。

此時室紀伊の両半島は宝永地震の場合と同じや、南上がりの傾動を起こした。

今村博士の調査によると、田辺町附近を東西に走る線を軸として、南端は隆起するし、北側は沈下して、南端の串本で約一、二米隆起、和歌山市外の加太で約一米の沈下を見た、尚此の地震に際して、紀伊半島の鉛山、竜神、峰等の温泉は、一時間湧出が止まってしまった。

#### ○明治三十二年三月七日 熊野灘地震

大森博士の説によると、此の地震の震源は、北緯三三度五〇分、東経一三〇度三〇分の海底で、紀伊、大和及び大阪は地震が強くて、多少の損害があった。

本来、尾鷲両警察署館内を通じて、倒潰家屋三五破損六二、死者七、三重懸全体の負傷者一九九人であった。

#### P、明治四十二年十一月十日の地震

震源は土佐南西端の南方八〇KMの沖合海底で、九州四國地方に被害が多かった。

### 三. 輪内を襲った昭和地震と津浪

#### A. 震 災 浪 禍 の 実 相

其の年は不思議なほど海の騒がしい年であった。秋頃から続いてスズキがあり浜にはザアザアと波の打ち寄せる事が度々あったり、又小さな津浪かとも思はれる様な浪の来た事もある。

昔から三兵衛屋の処まで潮が引けば津浪が来ると伝へているのに、近頃はそれ位ではない、潮干狩りをする春ともなれば、同家から更に一〇〇米二〇〇米の沖のほう迄干潟になつてしまう程であった。

近年古川の海底が隆起して浅くなった事も事実である。明治四十二年から昭和六年迄二十三年間に北牟婁郡船津村の大田沼附近で七センチ、木本町鬼が城附近で十二センチ、潮岬附近で十五センチ程沈下したのに、此の辺だけが隆起するというのはどうした事かと、不思議に思った事もあった。之が今度の地震の前駆的現象であつたかもしれない。

昭和十九年十二月七日、今日はいつにない暖かな日である、村の人々は薄着のまま山へ浜へ、或いは畑仕事にと皆出てしまった、晝休みも寛くりすんで午後の仕事にかかって暫くしてからだつた、ゴウーと云ふ響と共に、山の木の葉は風に揺れる様にユサユサとして来た、丁度一時二十五分である。方々で山鳴りがする、其の内地面が揺れだした、上から大きな石が転げ落ちる(古江道)段々と大揺れに揺れて歩くのに難儀である、然も其の間が長い凡こそ二三分も続いたであろう、此の時農業会の庭に積んであつた米俵は転げ落ち、松原薬店の箆笥の上の物は残らず落ちてしまったそうである。大河谷の上の方の溝は濁って

来た、松原屋のポンプが息するようにブクブク噴出したと云ふ、そんな家はまだ他にもあったとゆう事を聞いた。

明治三十二年の地震に逢うた人たちは、今度は其の時の地震よりも揺れ方が弱かったので、そう対して驚きもせず、あまり心配もしなかった。其の内砂浜にチャブチャブと浪が打ち寄せるのを見た五、六分たったと思う頃、それよりも大きな波がザアザアと岸の方へ寄せてくる、地震で土地が動いたのだから、少々位海の水の騒ぐのは当たり前だ、其れに三十二年の地震の際も、彼程の強震でさえ津浪が来なかったのだから、それ位の地震で津浪が来る筈がないと安心したのが失敗だった。

発震後二十分位たって一時四十五分、今迄静かだった海が一時濁って来た、海の水は一時にムクムクと盛り上がって来る、それ津浪だといって周章ふためきながら右往左往する人の群、子呼び親を探す捜すわめき声、救いを求める人の叫び、今迄眠ったように静かだった平和の世界は一瞬にして修羅の港と化し生き地獄其の儘の姿に変わってしまった。

小高い所に灘を避けて津浪の襲来する模様をみて居った人の話を総合すると。

海の水が急に嵩を増したと思ふと、清水館のあたりから小山の様になって飛沫をあげ、船場の附近からは一層高くなり、ゴオーと云ふ唸り声を立てながら濁りかえった水が猛り狂ふ、恰も魔物が何者かに襲ひかかる様な形相で覆ひ被さって来た、こんな言葉で其の時の浪の様子を表せない、其の時の凄かった浪の姿を今思い出してもぞっとする。

大河谷の下流に在った出馬医院の本宅は見る間に倒れてしまった、此の時は浪高既に六、七米もあったと思う、彼の高い二階建の公会堂の屋根よりも高かったと思はれる様な波が、奥へ奥へと進んでいく、波にぶつかる、家々軒々は一溜まりもなく倒れて土煙をあげる、眞実に将棋倒しである、浪のしぶきと土煙とで、海も空も濛々として向ふはちつとも見えない。

倒れた家や丸太が泥水に漂ひながら奥へ奥へと堰かれて行く、波は鈴河橋を越して大垣から七八百米位の奥まで押寄せて行った、小字岸の<sup>アザキシ</sup>辺から鉄砲州、大河谷、浜通りにかけての低地の家は凡て流されてしまひ、今は<sup>タヒタ</sup>平の田も無ければ、古川も見えぬ、無論古川橋など有ろう筈はない、塩浜に残っていた巨松の梢が少し計り水に浮いたやうに見える、浅間山の麓まで一面の広い泥海である、賀田の在所の半分は一時泥海の底に在った訳だ。

沖の方では二回目の浪が小山の様になって高く低く前よりも嵩を増して襲来した、其の内一回目の浪が引き初めた、それが古川橋の辺まで来ると一時にぶつつかって高く飛沫をあげ、渦を巻いてグルグルと廻る、其のうち潮浜の裾あたり迄引いて行った、浪の引いた跡は割合静かに瀕んである。

家も丸太も、箆筒も米櫃も、夜貝も衣類も下駄も釜もありとあらゆる家財道具の一切は、泥海の渦に巻かれながら山主神社の下へ押寄せられ更に浅間山の下の方の岸に沿って大きく渦を描いて行く。飛鳥神社下から深津呂にかけて一線を劃して海の水は落差三米位もあるかと思はれる程、上段と下段とに分かれ、上段の浪は荒れ狂っているが、下段の沖の方は割合浪は静かで、小船はいつものやうに平気で櫓を漕いでいる。

三回目の浪が押寄せて来た、二回目程ではないが、流失物は湾の中一面に拡がって、船の出入りが出来ぬ程である。

大きな機帆船は浪に漂って焼野の奥に打ち上げられたのもあれば、飛鳥神社下の造船場で建造中の船は沖の砂洲へ据っているかと思ふと、丁度同じ砂洲の処に碇を投じていた船は、飛鳥神社裏の造船所へ置き換へられた様に据わっていた。

五回目の浪が引いて海は平穏になった、もう夕暮れ近い頃である。跡は荒磯同然、家も無ければ屋敷と屋敷の界も分からず、浜も道も屋敷もみな一帯である。二階だけ残った家が、其の俣道に座っているかと思へば、銀行や局の大きな金庫が扉が破れたまま、遠い所に転がって居り、何所の物やら、何が何やらさっぱり分からず、彼処にも此処にも至る所に雑然と重なったり散らばったりしている。

浪に吞まれて行衛不明になった人の家族や親戚の人達が、泣きながら死体を捜して求める声は夕暗に響いて一入哀愁を感じさせた。家を流された人々は知己親戚を尋ねて一時そこに灘を避け、親類縁者の無い者は学校とか寺院とか公共営造物に落ちついて夜を明かした、羽根の大川益太郎氏宅では六十幾人とか避難していたそうである。眠られない不安な一夜は明けた、海上はピッタリと凪いで小波一つ立てず、何処にそんな巨浪がいたずらをしたのであらうかと思はれるほどの静けさであるが、どんよりと重苦しい気が満ちて薄気味悪い様な寂しい姿であった。

流失物は湾の中一面に漂っている、敷布のかかった蒲団は海底に沈んで、飛鳥神社下から曾根の網代の辺の海底は眞白く見える、潮は平常より二尺以上も高く、満潮時に於ける秋潮位の状態でいつ迄も乾かない、それが二ヶ月も続いたであらう。

#### (曾 根)

地震が揺り止むと大抵の人は後ろ畠に避難して来た、神社裏の造船場の人たちが四五人走って行った、続いて津浪だ津浪だと呼びながら駆けて通る、役場の前へ出て見ると向井の磯の海の中の石が顕れて見える、其の中にむくむくと波は静かの盛り上がりて来た、酒井新次氏は船に乗っていたが、船は岸の方に寄せつけられたので、飛び降りた程の静けさで盛り上がりて来た、お宮の太鼓が流れ出した、三回目の浪が来た時船溜りの堤防が崩れた、其の時神社の拝殿も流失してしまった。

寺下憲一氏宅前の磯にヒタヒタと打ち寄せて来た、と思ふ間に盛り上がりて来るそれが漸次逢神川の川上へ逆流して石橋のあたりで岸に打つつかかり、右手に回転して狂ひ廻る、其の内にゴーっと物凄い音を立てて奔流の如く引いて行く宮の前から網納屋の辺迄干潟になってしまった、引き終ると暫しの間一碧の静かな海となる、更に二回三回と押寄せて来た。

西仁朗氏宅のオダレの屋根に薪が載っていた、酒井滝之助氏の納屋の二階の床上八寸位の処まで浪が上がり、二階にはハダカミが沢山跳ねていた、寺下憲一氏宅でも、四十日許り過ぎてから、尾鷲から来た荷物が包装も解かず其の俣二階に上がっているのを発見した、宝永の時には平石まで来襲したと云ふから、どれ程であつたらうかと思ふ。

(古 江)

地震が揺り止むと直ぐ様築地で海の水が噴き出してきた、其の間十分位も続いたであろうか、其の内海上一面にブクブクと白い沫を立てて沸いてきたと思ふ間もなく七寸位潮が引いた、処が今度は六尺位も盛上がって寄せて来た、暫くすると岸から一町位の沖合迄干潟になり、海の底に大きな石が転がっているのが見えた、今度は前よりも高い巨きな浪が寄せて来たと思うと、家はメリメリと潰れてしまう、丁度、大きな力の男が何かを圧すようにグウと潰れていった。安政の時には中森林助氏の精米所の処にあったクネンボの木へ鯉船を繋いだとゆうから、今度の浪よりももっと高く寄せて来たのであろう。

(梶 賀)

浜で海水を汲んでいると、砂が柔らかくなって、ブクブクと脚がめり込んで歩くのに困った、ホウホウの体で陸へ上がって来ると、地震が起こったさうである。

其の内に海の水が盛り上がり来て小山のように見えた、大型漁船は浪に漂って彼方の岸此方の浜へと打つつかる、其の内に潮は引き、丁度宮の下迄干潟になってしまった、大きな石がいくつともなく転がっている、海の底がブクブク湧いてゐる。暫くして再び水嵩を増して盛り上がり来た、向井では三米二十糶、奥の橋の近くで二米五十糶くらい上がったらしい、潮の引いた後には、海の底の色々な魚がピンピン跳ねていた。

婦人会の役員会に出席していた人達は、地震が起こったので、帰る途中網代迄来ると浸水して通れない、上の山を通過して梶賀道に出た、其の時丁度煙幕を張ったように白くなって、賀田は一寸も見えなかったとゆふ。

晝飯を終へてから、前庭の池塘に鯉や金魚を眺めてみた時地震が起こった。池の水が激しく動揺する、同時に身も倒れそうで歩くことが出来ない、引手の方面を見ると、石垣や畑が崩れる。漸く揺り止んだので家に入り、戸締りをして家族と共に裏口から畑伝ひに、曾根道のオオダへ避難した、ここは梶賀中での安全地帯として村中の避難場所である。

地震が止んでから約後十五六分して津波が来襲して来た、浜はすでに海水が盛り上がり来て、浜の隠居の石垣一杯に浸水、常盤橋の上も浸ってしまった、宮の浜及小梶賀附近の海上にみた伝馬、モーター漁船は櫓を操り、発動機船は浪に漂いながら浮かんでいて、津浪が終わると、何事もなく悠々と帰ってきた。

第二回目の浪は高さ六七尺、第五回目に至って平静に復した、第一回目の浪が引いてしまうと、宮の浜も堤防沖合迄の底が顕はれたが、順次引潮の度合いも小さくなり、五回目に平静に復えると、心持の悪い程滞っていた。

第一回目の津浪で、海岸に上げてあった船、船具、木材、ドラム官、網等は流失して海上を漂ひながら、奥の川深く押し流されて打揚げられた、当區の被害状況は次の通りである。

1. 人畜の被害 黒芳助の子信造九才崩壊した土砂の下敷きとなって死亡
2. 流失家屋 榎本嘉助
3. 浸水家屋 倉本長平、中川房子、野中定七、川口文六、川口房吉  
榎本富朗
4. 倉庫浸水 浜中広之輔二、浜中嘉平治一棟
5. 船舶破損 和船三隻
6. 屋敷崩壊 部分五ヶ所
7. 畑地崩壊 部分五十七箇所

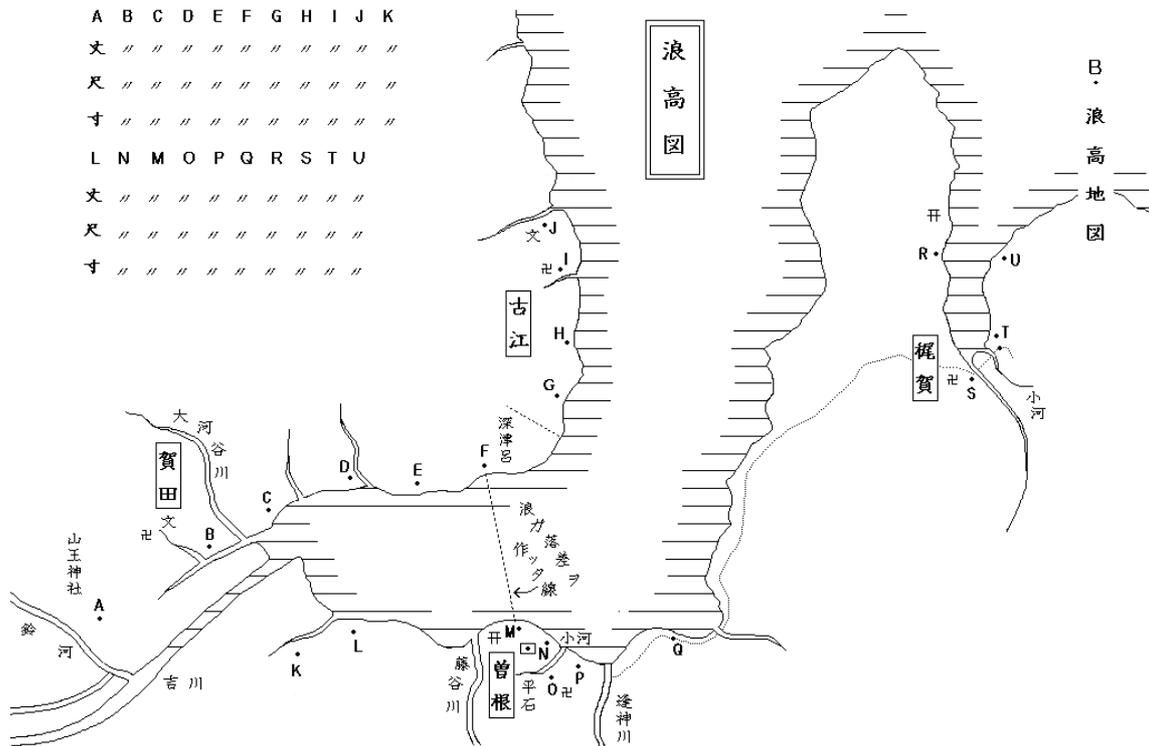
賀田曾根との連絡全く杜絶し、電燈消え眞の暗黒の世界である、夜に入っても大小の地震五十六回揺った、翌る八日未明中村市右エ門氏と共に、モーター船で賀田や曾根に行ったが、海上には流失した木材、倒壊した家屋、家具など総じての物資が無数に浮かんでいて、船の航行が困難であった。

この地震で著しい変化を来したのは、海岸の地面全般を通じて約三尺位増水して不能となってしまった。(浜中広之輔執筆)

(登一丸船上にて)

まだ出帆迄に暇があった、東京から夜行で来て疲れているので、船室に入って寝転んでいた、すると急に機械が掛った様に船がドンドンと振動し出した、出帆には未だ早い、何うしたのかと思っていると、地震！地震！といふ叫び声がしたので甲板にでると陸には土煙が上がって人々は馳せ騒いでいる、其の内誰かが津浪だと叫んだ、沖はもう白煙が立って堤防から沖のほうは何も見えない、其の内に浪は盛り上がって来た、陸へ飛び降りようとするコンクリートの壁がガラガラと崩れてしまった、危ない！と制止されたので思い止まった、同時に纜がプツンと切れた、濁り返った水は段々嵩を増して来た。

何千とも知れぬ程浜に積み重ねてあったドラム缶が一時に流れ幾百かの大小の船は濁った渦に巻かれながら彼方此方と漂っている、碇泊中の軍艦も渦に巻き込まれ、船と船とがぶつつかる様である、どうなる事かと思っていると、今迄浪のまにまに漂った自分等の船はピタリと止まった、浪は物凄い勢いで引き初めた、下を見ると其処は畑だ、傍の家は倒れてきて船にぶつつかった、船はバリバリと壊れてしまう、丁度製氷会社の辺りである、ヨシと計我を忘れて船から飛び降りた、倒れた家や流失物は道いっぱい重なり合っている、其の上を跨いだり飛び越えたりして避難した、二回目の浪が来た、何の辺りか知らぬが膝の処まで浸かって来た、何処を何うしてきたのか、尾鷲役場の門が向こふに見えたのでホッとした。(倉本 菊枝誌)



C. 罹災状況

本村役場の調査によると、罹災家屋は次の通りである。

罹災家屋八八十六戸、内流失した家屋百八十七戸、半壊住家十六戸、半壊非住家十六軒、床上浸水四十二戸、床下浸水六戸、要扶養者三戸(十一人)

各 区 内 訳

	流失	全潰	全非	半潰	全非	床上浸水	床下浸水	被災人
賀田	一六七	四	六	一六	一六	三	六	七四〇
古江	・	・	・	・	・	二一	・	五〇
曾根	一一	・	・	・	・	三九	三	二〇二
梶賀	・	・	・	・	・	四	・	二一
合計	一八七	四	六	一六	一六	六七	九	一〇一三

上の内大きな建物で流失したものは、黒潮青年学校七十二坪、賀田郵便局三〇坪、百五銀行輪内支店三〇坪、南輪内巡査駐在所二〇坪、南輪内村農業会事務所二〇坪、同倉庫三〇坪、木本區裁判所南輪内出張所事務所三〇坪、同倉庫一五坪、他輪内造船所、昭栄座劇場、大川浦吉製材所、だるまや貯炭倉庫、営林署板材置場、及事務所等である。当時の戸数及人口を各區別に列記すると、

賀 田	古 江	曾 根	梶 賀	合 計
三四七戸	二七二戸	一一九戸	一一九戸	八五七戸
一、四〇八人	一、一九六人	四八二人	四七七人	三、五六四人

其他船舶、魚網、田畑、家畜等の被害、大型船舶の罹災したものは次の四隻が大破した。

栄 吉 丸 (森岡牧太郎所有)

河 内 丸 (海務局所有) 二隻

勢 吉 丸 (新鹿長野忠一郎所有)

小型船の破損したもの、古江に於いて三隻、賀田、田七町一畝、畑五町八反流失して、作付不能となってしまった。

薪炭の流失四千五百俵

家畜、牛四頭、兎二五頭、鶏五〇羽流失

魚網流失被害見積額 古江三万円、曾根一四万円、梶賀三万円、合計二一万円

罹災者氏名及び罹災人員

賀 田

東 なみ子二、	榎本 富蔵四、	東 初男六、	小川彦四郎四、
小川 成子四、	榎本 巽九、	大川 若一六、	森岡 重吉八、
片岡 きさ一、	大川 四郎五、	浜中 弘行七、	浜中 繁雄四、
鈴木八兵衛二、	榎本 しめ一、	後呂安次郎二、	庄司かんゑ二、
平尾 増男四、	大川 幸男六、	坂本登美子一、	大川文之助五、
榎本ちゑの一、	榎本寛一郎三、	小川吉三郎三、	杉下 伸男三、
榎本 つね二、	斉藤 末吉五、	榎本 荒助四、	小川 武六、
家崎甚之助二、	大川 浦吉三、	内山 春生二、	榎本良之助一、
大川 勝藏六、	杉下惣三郎一、	榎本 重之二、	浜戸 茂四、
平谷ちとせ三、	大川 好夫九、	大矢定次郎二、	大川泰三郎五、
大川助太郎四、	大川 もと二、	大川 松市一、	大川 沢吉三、
森岡重太郎二、	大川達太郎三、	森岡牧太郎四、	杉下 利一六、
杉下 利助二、	大川 嘉吉五、	尚本 萬吉三、	榎本 敏夫四、
山田勘次郎三、	榎本嘉之右衛門五、	大川文太郎二、	大川 庄六二、
榎本 高一、	大川 村司四、	大川 茂子二、	大川おぎん一、
大川 徳夫四、	阪本 達夫二、	大川寅之助一、	杉下 苗吉二、
阪本きよゑ五、	山口 八郎三、	榎本仙次郎三、	桑木 幸次三、
榎本武平次七、	小川はなよ一、	野地定之助七、	谷 忠太郎二、
中森 考四、	榎本峯太郎七、	杉下苗次郎二、	宮本 キヨ三、
浜田 すげ一、	杉下 恒次六、	竹村 音吉三、	田畑 為吉一、

鈴木つるゑ三、	榎本 源子五、	大川常 <sup>エ</sup> 門二、	水野 一雄四、
杉下吉太郎八、	東 正次郎二、	出馬 利助六、	中村權之助五、
竹村 静雄七、	小川 準一五、	森 久子四、	浜中 輝千六、
大川梅太郎三、	榎本 繁治六、	小川そのゑ二、	股？脇？市藏四、
榎本 儀藏五、	河上新三郎三、	榎本潔次郎二、	杉下 近藏四、
三木 三次四、	田中 通司五、	榎本 種吉五、	阪本 吉雄六、
浜岡 芳一五、	奥地 文吾五、	森岡 一次一、	森岡 たづ一、
大川武次郎四、	森 芳尚七、	三國 慶吉九、	大川 岨松二、
大川 一尚五、	山本謹次郎四、	浜中 ゆう一、	岡村富太郎一、
稲田 弁次四、	竹村 優治五、	大川 利一三、	倉本為一郎二、
大川 勝治七、	大川 ゆす三、	大川 載吉六、	松原くすゑ二、
大川 かる三、	榎本 好文三、	榎本徳三郎三、	大川五十鈴六、
小川 彦吉六、	森岡ならゑ三、	大川しづ子四、	大川ひでゑ二、
石橋酉五郎三、	森岡 一弘六、	榎本照太郎五、	大川 保三、
小川たまの一、	榎本 勇吉二、	小川 義一五、	大川久之亟三、
大川いさ子一、	大川千代松八、	大川 薫三、	大川 熊市五、
大川 しも四、	竹村 鋭夫三、	榎本 はん二、	榎本 良藏一、
大川 みき四、	小川 半助六、	大川とめの五、	棕野 貞一七、
森岡徳十郎五、	武内くりゑ三、	榎本 松文一、	大川 との二、
湊 こま四、	大藤嘉十郎四、	畑野次郎藏七、	小川辰五郎四、
西原きみゑ三、	大川 清吉、	小川 恒郎二、	中島 喜七二、
大川 さよ子、	杉下 よつ、	？ 定利、	竹平徳太郎七、
中島 常一七、	速水久三郎五、		
曾 根 州			
森本 弥藏七、	糸川 力応七、	中村しげの二、	酒井 かつ二、
奥村 賢良六、	竹村 利八三、	江川 肯四、	偉世 繁生八、
奥村米太郎三、	佐野 助夫六、	石垣 まさ七、	奥地京家屋〇、
賀 田			
田中正次郎三、	東 寅五郎七、	岡本 らく三、	小川 深三、
榎本 喜作 、	杉下益太郎六、	浜中 幸一二、	榎本岨次郎 、
木下 寅由七、	大川 和藏二、	榎本すぎゑ一、	木地 孝四、
大川 竹藏六、	榎本 りつ三、	大川うめを一、	榎本仙次郎三、
曾 根			
向井 儀助四、	大川角太郎二、	森下富所郎三、	弓場 てる三、
吉成保太郎七、	中森重太郎四、	向井 しん一、	中森覚十郎六、
弓場こつゆ三、	西 仁郎七、	石垣 利雄三、	佐野清次郎五、

森本 定助六、 森 市郎五、 森 みや一、 向井 駿治六、  
 酒井滝之助二、 奥地 謙次三、 糸川 末吉二、 西 長太郎四、  
 森 寅之助四、 中森 実六、 酒井庄太郎五、 西 正一、  
 田中太郎べ五、 江川 新五、 山口 力蔵五、 森 ふじ、  
 佐野佐平治、 森 和七、 中森誠重郎八、 弓場 國夫四、  
 中森 戈吉三、  
 古 江

大川彦四郎三、 大川苗次郎六、 中森 問衛六、 大川 友吉四、  
 中森太郎一五、 大川 長松三、 大川清四郎二、 中森 卯一三、  
 中森 嘉藏二、 大川 柳吉三、 大川 覚吉七、 大川音次郎七、  
 大川嘉三郎五、 庄司 良一三、 大川安次郎二、 平野 繁松五、  
 中森嘉四郎六、 糸川万十郎五、 西 茂三郎一、 大川亀次郎三、  
 庄司富三郎二、 榎本ゆすゑ五、 大川 庄十七、 大川 実藏五、  
 梶 賀

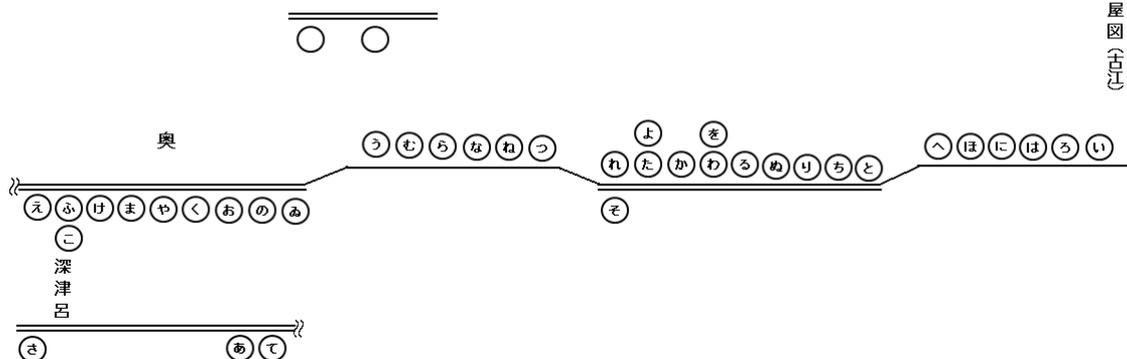
黒 ゆきの四、 倉本 長平一、 榎本 富郎、 川口 文六、  
 (以上浸水)

賀 田  
 小川金之助二、 小川忠一郎四、 大川孔次郎四、 大川 亀吉七、  
 曾 根

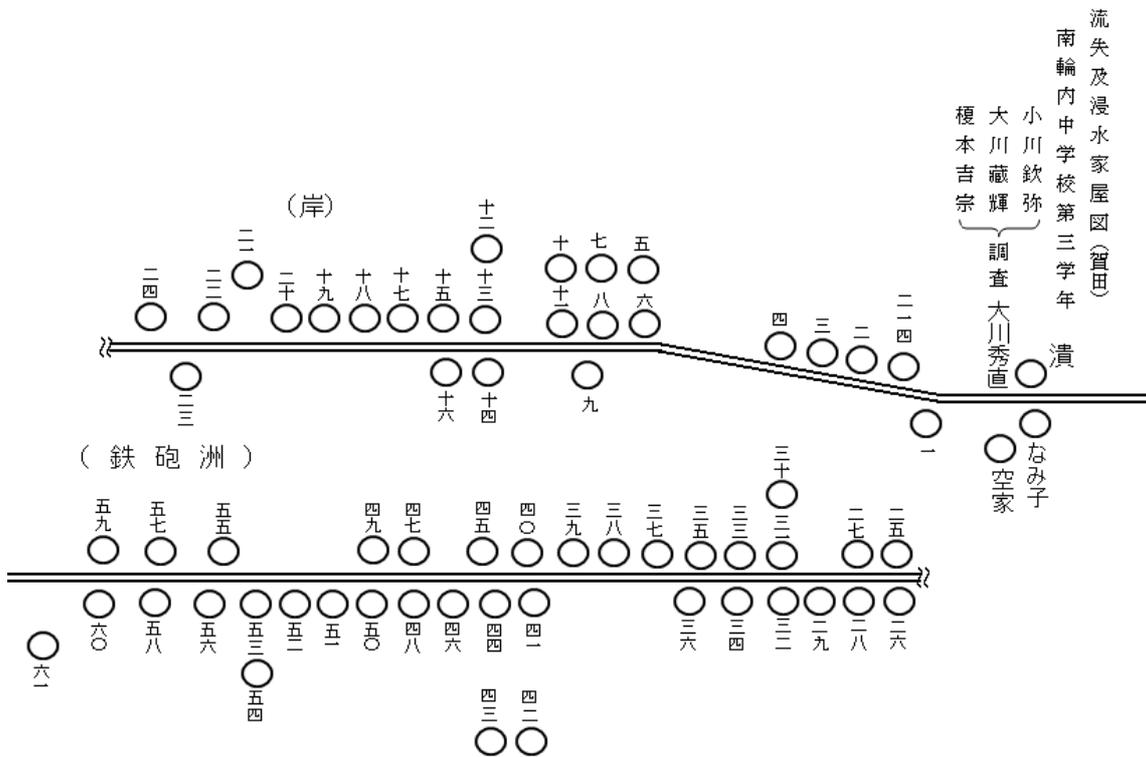
寺下 憲一六、 森 やす二、 加藤億太郎五、  
 古 江  
 大川 乙松七、 庄司 安市八、 中森 多吉八、 小川 須枝二、  
 (以上半壊)

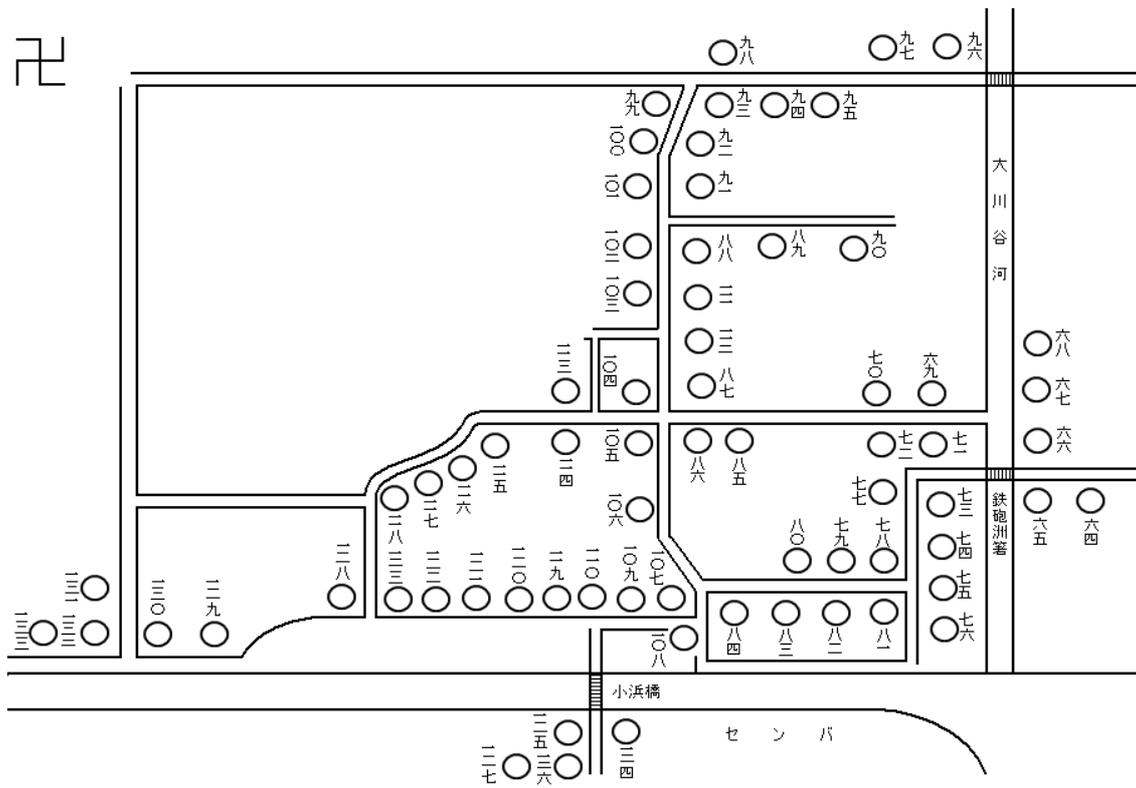
古 江  
 大川 太藏、 庄司 又次郎、 漁 業 会、 庄司 国三郎、  
 大川 半藏、 大川 亀次郎、 庄司 源三郎、 中森 篤、  
 (以上非住家浸水)

浸水家屋図(古江)

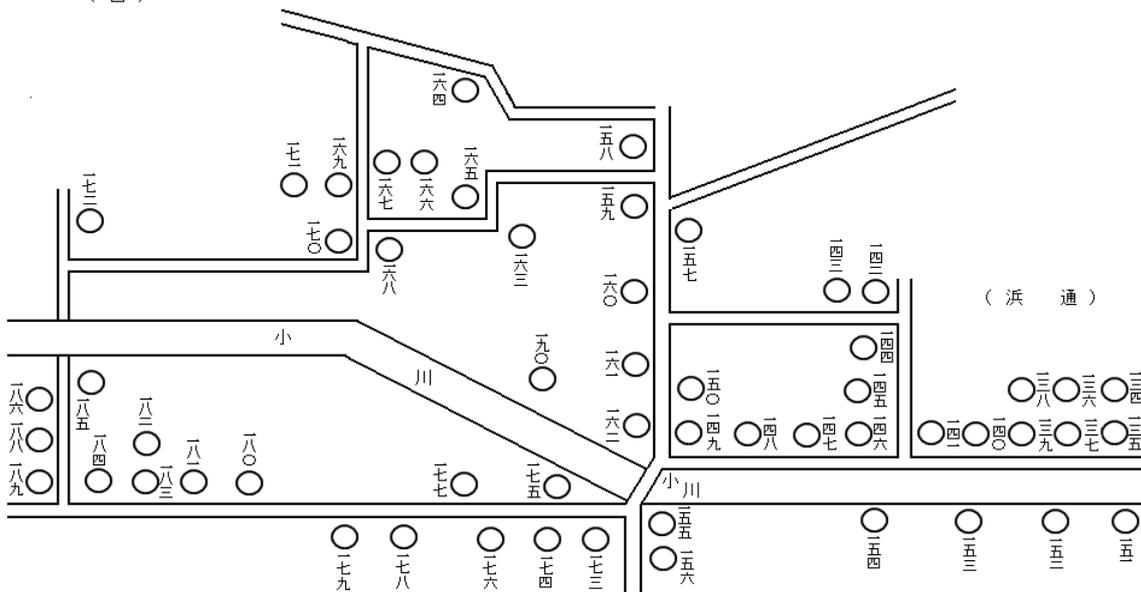


い	六	川	実	藏	5	ろ	庄	司	勇	7	は	庄	司	つま	4
に	大	川	庄	十	7	ほ	大	川	彦四郎	3	へ	大	川	田次郎	6
と	中	森	周	衛	6	ち	周	衛	納屋	0	り	大	川	友吉	4
ぬ	周	三郎	納	屋	0	る	又	次郎	納屋	0	を	中	森	卯一	3
わ	中	森	太	一	5	か	大	川	長松	3	よ	大	川	清四郎	2
た	半	藏	納	屋	0	れ	中	森	嘉藏	2	そ	漁	業	会	0
つ	大	川	柳	吉	3	ね	中	森	篤		な	大	川	覚吉	7
ら	大	川	音	次	7	む	大	川	喜三郎	7	う	庄	司	良一	3
み	大	川	安	次	2	の	平	野	繁松	5	お	半	藏	納屋	0
く	中	森	喜	四	6	や	糸	川	萬十郎	5	ま	西	重	三郎	1
け	太	藏	納	屋	0	ふ	大	川	亀次郎	3	こ	亀	次郎	納屋	0
え	源	三郎	納	屋	0	て	庄	時	富三郎	2	あ	榎	本	ゆすゑ	5
さ	早	川	秀	敏											





(西)



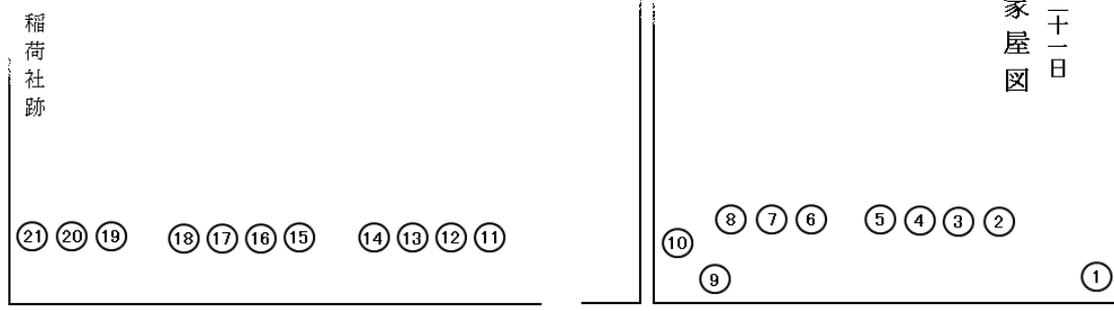


五八	榎本 矩巳		五九	大川 亀一	1	六〇	榎本喜之右衛門	5
六一	榎本 高一	1	六二	大川 庄六	2	六三	大川 村司	4
六四	大川 茂子	2	六五	大川 ぎん	1	六六	大川藤エ門	4
六七	杉下宗太郎	1	六八	阪本 達夫	2	六九	鈴木つるゑ	3
七〇	小川芳太郎		七一	榎本 源子	5	七二	田畑 為吉	1
七三	水野 一雄	4	七四	杉下 啓一		七五	啓一 湯屋	0
七六	出馬 利助	6	七七	峯太鍛冶場	0	七八	大川常衛門	2
七九	浜中 輝干	6	八〇	林梅昌空屋	0	八一	東 政治郎	2
八二	脇 一藏	4	八三	大川梅太郎	3	八四	榎本 繁次	6
八五	中村権之助	5	八六	だるまや店	0	八七	浜中 すげ	1
八八	杉下 恒次	6	八九	杉下 よう		九〇	野地定次郎	7
九一	小川はなよ	1	九二	桑木幸次郎	3	九三	登記所山口	3
九四	榎本仙次郎	3	九五	岡本 らく		九六	榎本 喜作	
九七	杉下増太郎	6	九八	浜中 幸一	2	九九	阪本 一樹	5
一〇〇			一〇一	榎本武平治	7	一〇二	中森 孝	4
一〇三	榎本峯太郎	7	一〇四	竹村 音吉	3	一〇五	だるまや店	0
一〇六	小川 準一	5	一〇七	奥地 文吾	5	一〇八	魚 市 場	0
一〇九	百五 銀行	5	一一〇	榎本 正一	5	一一一	杉下苗次郎	2
一一二			一一三	静雄屋納屋	0	一一四	竹村 静雄	7
一一五	榎本 儀藏		一一六	榎本 繁六		一一七	榎本潔次郎	2
一一八	河上新三郎	3	一一九	郵 便 局	0	一二〇	静雄 納屋	0
一二一	巡查駐在所	5	一二二	森岡 一次	2	一二三	竹村音なや	0
一二四	農 業 会	0	一二五	木炭 倉庫	0	一二六	吉夫鍛冶場	0
一二七	阪本 吉雄	6	一二八	三木 三次	4	一二九	杉下 近藏	4
一三〇	公 会 堂	0	一二一	文平氏納屋	0	一三二	竹村 優次	5
一三三	大川 利一	0	一三四	倉本為一郎	2	一三五	倉本為一郎	0
一三六	勝治鍛冶場	0	一三七	大川 勝次	7	一三八	ゆす 納屋	0
一三九	大川 ゆす	3	一四〇	大川 截吉	6	一四一	榎本 好文	3
一四二	大川ひでゑ	2	一四三	久保喜三郎		一四四	ひでゑ納屋	0
一四五	榎本徳三郎	3	一四六	徳三郎床場	0	一四七	徳三郎隠居	0
一四八	大川五十鈴	6	一四九	小川 彦吉	6	一五〇	彦吉氏納屋	0
一五一	田中 英弥	0	一五二	昭栄座劇場	0	一五三	松原くす枝	2
一五四	大川 かる	3	一五五	大川 熊市	5	一五六	熊市氏納屋	0
一五七	大川しづ子	4	一五八	大川 保	3	一五九	榎本庄太郎	5
市六〇	森岡 一弘	6	一六一	岩崎酉五郎	3	一六二	森岡ならゑ	3
市六三	庄太郎納屋	0	一六四	小川いさよ		一六五	大川久之亟	3



イ	神社	拝殿	0	ロ	森	保	7	ハ	中	森	誠十郎	8					
ニ	弓	場	國雄	4	ホ	中	森	武雄	3	ヘ	青	年	俱樂部	0			
ト	中	森	実	6	チ	仲	盛	実	納屋	0	リ	江	川	新	5		
ヌ	酒	井	庄太郎	5	ル	糸	川	かめ		オ	山	口	力	藏	5		
ワ	酒	井	与一		カ	西	正	一		ヨ	森	寅	之	助	4		
タ	奥	村	米太郎	3	レ	奥	地	京	0	ソ	伊	世	繁	生	8		
ツ	西	長	太郎	3	ネ	糸	川	末吉	2	ナ	森	ふ	じ				
ラ	奥	地	謙次	3	ム	向	井	源次郎		ウ	助	夫	隠	居			
キ	佐	野	助夫	6	ノ	滝	之	助	納屋	0	ヲ	佐	野	佐	平	治	
ク	酒	井	滝之助	2	ヤ	田	中	太朗	べ	5	マ	森	一	郎	納	屋	
ケ	酒	井	逸郎		フ	森	本	佐馬	之	助	コ	漁	業	会		0	
エ	森	市	朗	5	テ	森	み	や	1	ア	森	本	定	助	6		
サ	石	垣	利雄	3	キ	佐	之	清次郎	5	ユ	弓	場	こ	つ	ゆ	3	
メ	西	仁	郎	7	ミ	向	井	寅次郎		シ	庄	司	清	次	郎	5	
エ	佐	野	はん	3	ヒ	森	本	勝一	5	モ	中	森	覚	十	郎	6	
セ	向	井	しん	1	ス	中	森	甚次郎	4	ン	森	や	す	2			
A	吉	成	保太郎	7	B	弓	場	てる	3	C	竹	村	利	八	3		
D	森	や	す	2	E	江	川	肯	2	F	奥	村	賢	良	6		
G	酒	井	かつ	2	H	中	村	しげの	2	I	寺	下	憲	一	6		
J	憲	一	菓子場		K	大	川	角太郎	2	L	森	本	弥	藏	7		
M	糸	川	力	応	7	N	向	井	儀	助	4						

昭和二十一年十二月二十一日  
津波流失家屋図



1  巡查駐在所	2	3  倉 庫
4  榎本 繁六	5  榎本 近藏	6  榎本 繁次
7  三木 三次	8  榎本 正一	9  農 業 会
10 黒潮青年校	11 大川 利一	12 小川忠一郎
13 常夫	14 田中 房代	15 大川 ゆす
16 榎本 正巳	17 大川 郷	18 大川 荒
19 大川しづ子	20 大川五十鈴	21 松原くすゑ

#### D. 遭 難 死 者

○大川勝治、小川由五郎、森金次郎氏

大川勝治、小川由五郎氏二人は曾根の造船場で仕事をしていて地震に逢った、揺り止んだので家へ帰るべくひた走りに走った、此時既に津浪は襲っていたらしい、吉川橋にかかった時にもう浸水して来た、橋を渡り切らうとする刹那、橋の袂附近であれ程堅牢なコンクリートの橋桁が折れてしまった、之はしまったと後へ引返そうとしたが、南無三曾根側の袂近くの橋桁も落ちてしまっている、同時に来合はした森金次郎氏と三人で、右往左往したが施す術もない、進退谷まるとは実に此の時である、見てゐる者もどうする事も出来ぬ、遂に浪に吞まれて行衛不明になった、三人共死骸は海から発見された。

○ 森岡重太郎氏同さと

逃げ遅れたのであろう、埋立の畑の中に建っていた家と共に流されてしまった、どうして屋根の上に登ったか、屋根の上に居る二人の姿を見た、小高い処から見て居ると、浪が打ち寄せる度に二人はうつ俯になって避けて居た、網を投げたら届く程の処まで寄せて来たので、息子の牧太郎氏は救助に飛び込もうとした、然し周囲の人々に遮られたので、涙を呑んで思い留まった。『今助けに行くから待って居れ』と叫ぶうちに、浪に漂ひながら何処ともなく行衛不明となってしまった、重太郎氏は其の日の夕方、浅間山の下から発見された其時には幽かながらまだ息が通って居た。

○ 中森徳市、大川時代、向井はるは氏

三人共農業会の事務員であった、徳市氏は出張先から帰った計りで、小浜橋袂（曾根よりの所）に在った事務所に居て津浪に襲われた、浸水と共に三人は懸道を奥へ奥へとひた走りに走った、百米を十秒で走る世界一の記録を持った人すら、津波の速さには追ひ越されるといふ位だから堪らない、丘から横切れ横切れと呼んだが、既に膝のほうまで浪に浸かって横切れない、遂にカイマガリの途中で倒れたきり浪に飲まれてしまった。

同じ事務所にゐた倉本守野はモンペを穿きに家に帰った処、最早浪が襲来して引き返す事が出来ずに命拾いした、一寸先に逃げた阪本吉雄氏は子供を連れていながら、早く横切った為に助かった、徳市氏は鈴河橋の附近から、時代氏はそれより奥の道路上に倒れているのを発見した。

○ 榎本勇一郎、同まり子氏

賀田郵便局に勤めてみた、地震だといふので、一旦家に帰った父勇一郎は局へ引き返して来た処、突如津浪が襲来したので、一方出口の前から外に出た、既に浸水は大きい、まり子と二人榎本種吉氏宅と百五銀行の間の細道を通って逃げる途中、早くも武村音吉氏宅の処で浪に吞まれてしまった。

○ 榎本薫氏

やはり賀田局に居て遭難した、浪に逃げ遅れたのであろう、然し家の屋根に上ったまま流れて行く姿を認めた、二回目の浪にたたきつけられた時姿を消してしまった、死体は曾根の網代の海上で発見した。

○ 竹村玉枝氏

地震と同時に平の上の方に避難してみた、再び家に引き返した時、津波の襲来を受けて、家と共に流失した、倒れた家を取りのけると、位牌を握って仏壇の前に手をついた俣の姿で発見された。

○ 森千代野氏

初めのうちは、津浪等来るものかと云っていたそうである、処が浪が押し寄せて来た、それにしてもそう高くは来まいと思ったのか、傍にあったタンクの上に昇って居たそうである、浪は段々盛り上がり来て、既に浚はれてしまった、古川橋の上流、川に沿った田圃で発見された。

○ 岩本末藏氏

時の駐在巡查田中道司氏の妻の父である、此の日巡航船で着いた計りを此の災難に逢ひ、家と共に流失したのである、大川兵太郎氏宅の下の方で、うつぶしになっていたのを見たが、直ぐ浪に吞まれて不明になった。

○ 山本よね氏

藤崎に近い処に在った家の近くの山へ上っていたが、再び家に引返した処を家と共に浪に流され、浅間山の下の方で、窓から首を出しているのを見た俣姿を消してしまった、今に至るも遂に死体は発見されない。

○ 大川吉之助、杉下利助、田畑為吉、片岡きさ氏

四人共家に居て逃げ遅れ、家と共に流死、利助爺さんは大川泰三郎氏の裏の家に押さえられ、きささんは海の中から発見された、田畑為吉さんは大河谷で。

○ 三國なを子氏

母親に連れられて避難の途中浪に浚はれて流死した、母親は九死に一生を得て灘を免れた。

○ 中森よね子氏（曾根）

家に引き返した処を、家と共に流されて死亡、九日眞浜の五十間計り沖合いで発見された。

○ 大川すま氏（古江）

婦人会の議之列席のため役場へ来ていたが、地震が揺り止んだので、古江へ帰る途中津浪にあって遭難、死体は鈴河の奥の方から発見された。

○ 黒眞次氏（梶賀）

地震の際川口庄太郎氏宅下の道路で遊んでゐたが、石垣が崩れて来て圧死直ちに掘り出された。

E. 九 死 一 生

○ 中村権之助氏

郵便局に於て勤務中地震が揺ったので、津浪は来るのではないかと、度々外に出て様子を見た、処が津波が襲来する様な風も見えぬので、室内に入って凡ての整理をしていると、津波津浪といふ叫び声がした、時既に波は入口から押し寄せて来て、室内一ぱいになる、前の入口からは出られない、局長浜中輝千氏と共に裏の窓から飛び出して板塀の上に昇った、水は段々と嵩を増して浸って来る、其の内に板塀はぐらぐらと揺れ出した。

浜中氏は逸早く倒れた家の屋根に飛び移ったので、自分も直ぐ様飛び降りた既に泥水の中である、あたり一面暗黒の世界だ、目は開いて居られぬ、口を開けば泥水を飲むに違いなひと思ひ、硬く口を閉じた、水面に浮び出ようとしても、どうしても出られない、如何しようかと考えていたが、それからは意識がない。

急にパッと明るくなった、稲荷神社跡附近の水の上である、丸太に閉じ込められて身動きも出来ずに浮いている、あたりは一面木材である、陸では大きな声で気を励まして呉れる、朗らかな気持ちだ、両手は丸太から出ていて自由である、右手を上げて陸へ応えの合図をする、奥え奥えと流されて行く、丁度巡航船にでも乗ったようでゆらりゆらりと大変気持ちがいい、其の内に山王神社の下え着いた、丸太を掻き分け木材の上を渡って、陸え上ってほっとした、浜中さんは迎えに来て呉れていた。（中村氏直話）

○ 浜中輝千

中村氏と同時に、局の裏から飛び出して塀の上に上った、塀は揺れだしたので隣の倒れた家の屋根に飛移った、屋根を伝ってようよう灘を免れた。

○ 東禅寺裏方佐野氏

婦人会に出席し役場からの帰途、藤崎で浪に浚はれ、平素水泳が出来ないのに、どうした事か、其時に限っていくらか泳ぐ事が出来た、丸太が流れて来た、つかまっていると、附近に居た松栄え丸によって救助せられた。

○ 三國うん氏

家の前に居て浪に呑まれたまま、大垣辺迄流され、砂の中に埋まって居たのを、うめき声が幽かに聞こえるので、掘り出した処、息を吹き返した、同じに流された娘の子は死亡。

○ 森みき子氏

三國さんと共に浪に浚われ、暫く漂う中怪我をしたが、大垣辺迄流され、辛うじて助かった。

○ 奥地すみれ氏

逃げおくれ家と共に流されたが、医者屋へ上って行く石段の処え打ちあげられて助かった。

○ 酒井しげ子、同しずよ氏

水中に没してしまった酒井滝之助氏の家の中に居て段々増水してくる水に天井へ押し上げられようとした時、田中巡査は屋根を破って呉れたので、其処から逃れ出て灘を免れた。

○ 向井志ん氏

中森覚十郎宅附近で浪に浚われて流れて居たが、森音吉氏が滝竿を差し出し其れに縋って引上げられた。

○ 伊勢はつゑ、同とし子氏

二人は酒井寅之助氏宅の前で流され、酒井平之助氏に助けられて灘を免れた。

#### 四、救 助 事 情

##### A. 村の救急措置

突如として起こった地震、続いて襲来した津浪、我等の郷土は一瞬にして廢墟と化し、荒磯同然の姿に変わってしまった、其の上村内は云うに及ばず、賀田、尾鷲同及木本間の電信電話は、電柱の倒壊と断線とによって、通信はピッタリと止まってしまった。然し今は躊躇する時ではない、村当局は直ちに警防団及び男女青年団、婦人会其他あらゆる統制団体の非常召集を行って、南輪内村駐屯所巡查田中道司氏指揮の下に、罹災民を書く親戚又は縁故者、寺院、学校、曾根天理教会堂等に収容避難せしめ、共同炊事を行って急にそなへ、郷地に村長西仁郎名義の下に次のやうな布告を出し、村民の協力を求めたのである。

第一、罹災民は食料や衣料に不安を持たぬよう。

第二、各戸米一升宛、浦団一枚、衣類一枚ずつ提出。

そして明る日、罹災者に対して次の品々を配給した。

燐寸小函一袋、ローソク二本、汐漬玄米一人三升づつ、炭一俵、生サンマ三本宛、牛肉五百匁、醤油、塩などである。

##### B. 災害救助復興協議会

村は直ちに災害救済復興協議会を設け、次の人々を任命して、救援の事に当らしめた。

本部長	西 仁 郎	総務部長	中 森 周 衛
		資材部長	浜 中 宰 一
		勤労部長	榎 本 庸 之 助
		土木部長	榎 本 正 一
		水産部長	中 村 市 右 エ 門
		農業部長	大 川 庄 六
		輸送部長	中 森 政 寛
		厚生部長	田 岡 龜 吉

##### C. 団 体 の 活 動

各種団体は毎日出勤して、死体の捜査、流失物の拾集、散逸防止、被害物の片付、食糧輸送、盗難防止、治安維持に至る迄、万全の策を取って、各団体聯絡の下に活動、遺憾なきを期した。

第一確保せねばならぬのは食糧である、梶賀水産協同組合所有船久立丸によって、長島食糧営団から三百俵の米を廻送した、内百俵を北輪内村へ転送したので、補充分として長島営団から廻送して貰ふべく交渉した。

十二月十五日現在々庫は、米百五十俵と、流失後に発見した飯用米、及供出用玄米（濡米）の数量百俵、合計二百五十俵である、然るに十六日から一月十四日迄一ヶ月間の一般

配給数量は三五、〇〇〇匁である、こんな場合の非常米は平素から保管しておかねばならぬ事を痛感した。

各種団体が必死となって活動したに係わらず、盗難にかかった物資も仲々多い事であった、初め警防団が流失物の全部を拾集して一つに纏め、個人勝手に持ち出す事を禁止したのであるが、政令一途に出る事が破れて、拾集しがたい状態になってしまった、こんな場合には、今少しく警察権を拡充強化するか政令が一途に出るような統制を取らねばならぬ。

又数日の間、流失物は浦の中いっぱいになって流れて居た、後になっての話であるが、死体捜査に全員を集中してしまった為に、資材を流失した事は夥しい額に上った、アバを作って喰ひ止めれば、大抵の物資は堰き止める事が出来たのである。

当時の警防団の役員氏名は次の通りである。

警防団長	竹村 静雄	副団長	中村市右エ門
古江部長	大川 広太郎	賀田部長	榎本 國十郎
曾根部長	佐野 清次郎	梶賀部長	大滝 壽太郎

#### D. 同情救恤

其の後各地から救援物資が入荷した。

砂糖特配 二〇二斤

- 麦作付被害面積（田畑別） 二十町歩
- 甘藷特配 十一才以上一貫 十才以下五〇〇匁 割当五十表
- 昆布佃煮 二三メ 四六メ
- 罹災者衣料切符 交付人員九四四名（四七二〇枚）
- 罹災肥料 窒素十俵 綿実カス五俵 硫安五〇袋

各地から送られた罹災者用物資

- 懸救済本部から マッチ二四〇〇個、毛布三〇枚、タオル五六枚、シャツズボン八四枚、白ネルー〇枚、ローソク一六〇本、
- 懸農業会から 作業ズボン一〇〇足、作業シャツ一〇〇枚、地下足袋一〇〇足、イモ六五俵、ムシロ二〇枚、大根四俵、
- 木本から 煮干十五袋、燈油二罐、牛肉二〇貫、キンシニ二〇〇個 蒲団三〇四枚、衣類三九五枚、食器一三五九、草履六八七、ムシロ二六〇枚、梅干六樽、甘藷一五俵、佃煮
- 尾鷲から 甘藷九四〇貫、箸一二〇〇ゼン、味噌五樽
- 長島から 米二〇〇俵、醤油五樽

## E. 復旧へ急ぐ

一般民衆の救助は約一週間で打ち切られたが、青年団警防団は更に一週間出勤して救援に当たった、遭難死者の遺骸も、山本謹次妻よねさん（今に至るも発見されず）を残して、十二月十五日頃迄に皆発見された。

十二日には警察電話も開通する。公衆電話も、賀田木本間は十二日、賀田尾鷲間は十四日に全通して平常に復した。其他各官衛は次の場所に出張所を設けて事務を開始、漸次復興の気運は其の緒についた。

駐屯所（南輪内村役場）	十二月七日
郵便局（田中武一郎宅）	全 九日
銀行（大川哲夫氏宅）	全 七日
登記所（南輪内村質屋）	全
農業会（大川 貢氏宅）	全
青年学校	

被災者も他の納屋隅や、二階借をするやらして、ぼつぼつ避難先から帰っていく。懸では懸営のバラックを建てて、罹災者を収容する事とした。

賀 田 三戸建九棟	四戸建て二十一棟
曾 根 三戸建一棟	四戸建て 二棟

其の内賀田に在った三戸建、四戸建三棟は、昭和二十一年十二月廿一日の津浪に流失してしまった。

## F. 合同葬儀

昭和十九年十二月十九日、遭難死者の為に、賀田東禅寺に於いて合同葬儀がしめやかに取行はれた、立ち昇る線香の煙も幽かにゆらめいている遺族たちの泣きじゃくる姿、一入哀れをもようす。

中森 徳一	四〇	波揺錦澄居士	全 しもゑ
向井はるか	二三	玉海恵宝大姉	糸川忠次郎
中森よね子	二〇	海室妙宗大姉	全 力応
大川 すま			全 複松
森岡重太郎	七三	愼然清海信士	全 牧太朗
全 さと	六九	佛海祖低信女	全 牧太朗
榎本勇一郎	五〇	巨海全濤居士	全 嘉順
榎本まり子	一九	潮流呑鞠大姉	全 嘉順
竹村たまゑ	五三	呑海龍珠大姉	全 静雄
大川 勝治	五三	潮流不勝居士	全 徳久

大川ときよ	三七	佛海全濤信女	全	ゆす
三國なを子	六	慈海流波童女	全	慶吉
小川由五郎	四九	刹海冬天信士	全	彦吉
大川吉之助	七一	蒼海竜門居士	全	千代松
榎本 薫	三七	法海藏身居士	全	良哉
杉下 利助	九二	風外清凋居士	全	利一
片岡 きさ	六七	天空自澄信女	大川	万助
山本 よね	五四	泡沫慈観信女	山本	謹次
森 金次郎	七五	碧流呑海信士	全	義直
全 千代野	四七	逐浪流波信女	全	上
田畑 為吉	八一	熊峯南林信士	不	明
岩岡 末藏	不明	震岩奇松信士	不	明
黒 眞次	九	常光禅 童子	全	至視

#### G. 救 助 美 談

南輪内村駐在巡查田中道司氏は、其の日曾根役場において地震に逢った、揺り止むと氏は直ぐ様曾根の被害状況視察に出かけた、隅々浜の附近へ来た時である、一遍に波が押し寄せて来て、逃げる暇もなく傍の船に飛び乗った俛、船と共に流されてしまった。

酒井滝之助氏宅では、一週間位前に大手術を行った計りの妻女菊野さんを避難させようとして戸板に乗せてつり出す処であった、田中巡查の乗った船は丁度其処へ流されて来た、田中巡查は病人ならば船に乗せて避難させようと勤めた、然し水は既に乳の辺まで浸かって来た、今はどうする事も出来ない、家の中へ引き返すと戸板は段々浮上がって行く、戸板を一旦流し元の上に置いたが、どうしても外に出す途がない、破風の処を破って外に出した、戸板は水に浮いているので、楽々運ぶことが出来た、隣の屋敷へ釣り上げ、更に佐平治氏宅へ休息させた、処が其処へも浸水して来た、次で安定寺へ避難させてほっとした、処が宅にはまだ酒井しげ子氏、同じづよの二人が残っていた筈である、田中巡查は船から滝之助氏の屋根に飛び移ると、水に浸かった家の中で人声がする、家の中にまだ二人残っていた筈だと云うと、巡查は直ぐ様腰の剣を抜いて屋根瓦をめくりコマイをこじ開け、二人のむすめを引き出して助けた、然も自分の義父岩岡末藏氏は浪に吞まれて、敢なき最後を遂げて居るのにも係わらず、私事をすてて人命を救助し、次で直ちに各種団体を指揮して救援の事に当たった、氏の行動に対して嘆賞せぬ者はなかった、徳遂に狐ならず、上司に聞こえて表彰を受けた。

向井志んさんは、中森覚十郎氏宅の辺で浪に浚われたのを、森音吉氏は竹竿を指出して救助し、伊世はつゑ、同とよ子の両名は、酒井寅之助氏宅前で溢れてみたのを、酒井平之氏が救助した、二人共懸から表彰を受けた。

## 久立丸表彰

昭和地震二回の地震津波の災害に対して、梶賀浦漁業会所属久立丸は、食糧運搬に、流失物のせき止めに、各般に亘って大なる功績があったよって木本警察署長から、次のような表彰状を贈られている。

## 表彰状

南牟婁郡南輪内村

梶賀浦漁業会所属 久立丸

昭和二十一年十二月二十一日当地方に震災発生するや当時未だ危険の状態にあるにも拘らず災害状況の連絡報告並その救恤に対して所属久立丸を急派し克く管内の治安を確保し迅速且つ積極的に協力したことは民衆警察の模範でありその功績大である。

茲に金一封を授与してその功を顕彰して労を犒う。

昭和二十二年一月十日

木本警察署長 中西 静 夫

## 五 震 災 記 念 事 業

記録が貴重なものであり、参考資料として重要な位置をしめている事は序文にも書いておいた、其れで後人の為に、是非ということは年来の希望であった、寺下憲一氏と其のことに就いて話しあった事も度々である。然し荏苒日を過しつつあったが、弥々機が熟して実行に移す決意をした、村会議員大川好武（賀田）、中森政寛（古江）氏と四人が発起人となって、計画案を立て、村長大川庄六氏に諮った処、之れは村がやるべき事業である、どうか君等の力で是非完成してもらいたい、とゆうような非常な熱意である。

十一月廿日、役場楼上に発起人会を開いて、計画案及予算について協議、各職務を分担して実行することにした、古江區長下地秀松、賀田區長田中武一郎、曾根區長糸川忠次郎、梶賀區長浜中健次氏の了解を求めて、區主催村後援とゆう形で、記念式を挙げる事とした。

## 計 画 案

- 一. 日 時 昭和二十三年十二月九日 正午
- 二. 場 所 賀田 東禪寺
- 三. 要 項
  - 1. 遭 難 死 者 追 悼 法 要
  - 2. 講 演
  - 3. 地 震 資 料 展 示
  - 4. 体 験 発 表 座 談 会
  - 5. 調 査 ( 波 高 図 作 製 )
  - 6. 記 録 作 製 ( 永 久 保 存 )
  - 7. 記 念 碑 建 設

## 係 員 決 定

- 倉本為一郎 講 演、編 集、会 計
- 寺下 憲一 記 録 案 内 状 (遺族、来賓)
- 大川 好武 座 談 会 議 長、挨 拶
- 中森 政寛 記 録、地 震 資 料 展 示
- 各 區 長 案 内 係

村は早速村会を開いて、経費金壱万円の支出を提案した、村会は満場一致之を可決して、物心両方面から応援して呉れた。

### A. 遭 難 死 者 追 悼 法 要

十二月七日に行う予定であったが、役場の都合で、九日の正午から行われた、会するもの遺族、村長、村会議員、區長、学校長、青年団長、局長、警防団長、農業組合長、婦人会長、其他有氏多数参列して導師大川常信氏によって、しめやかに取行はれた。

#### 村 長 弔 辞

本日茲に、昭和十九年七日の大地震における、犠牲者の慰霊祭を執行するにあたり、謹んで弔辞を呈します。

あの日お晝過ぎ、突然起こった大地震に続いて大津波の襲う所となり、流失全壊家屋二百戸、浸水家屋百戸、罹災者人員千人に及ぶ本村未曾有の大被害を蒙り、祖先伝来孜孜として築き上げた郷土は、一瞬にして廢墟と化した  
思ひに、ただ呆然自失したのであります。とりわけ之が為に二十有余の尊い犠牲者を生じました事は、本村初めての大悲惨事であり、当時を追憶すれば、今も尚その痛しい悲に、涙新たなるものがあります。

昭和二十一年十二月二十一日、再度襲った東南海大震嘯に、又々本村は甚大なる被害を被ったが、村民の復興意慾に、郷土の建設は着々と進捗している。

然し一度失った犠牲者は永へに帰らないのであります。再びこうした惨害を繰り返

すまいとの、村民の切実な叫びは、やがて平和百年の郷土を守るべく、防浪堤の実現に懸命の努力を捧げんとする次第であります。

私達は永久に銘すべき慰霊祭に臨んで、心より各霊位を供養すると共に、震災防護事業の建設完遂を靈に誓って、**?**か弔辞に代えるのであります。

昭和二十三年十二月九日

南 輪 内 村 長 大 川 庄 六

## B. 講 演

東京帝大地震研究所並財団法人震災予防協会囑託、武者金吉先生を招いて講演して頂く予定であったが、先生は都合あって出られないので、原稿を書いて送るからと詳細なものを送って頂いた、第七項の講演集はそれである。

## C. 体 験 発 表 座 談 会

割合低調であった為、別に頂を設けず、震災浪害の実相欄へ繰り入れてしまった。

## D. 地 震 資 料 展 示

地震聚報、復古の綴り、地鯰居士随筆（十二冊）南牟婁郡他誌、地震年表、大地震移動表、大地震発生地々図、田老村防浪施設図、大地震頻繁図、俗説による地震の前兆表、地震前に観察された魚の異常行動、耐震家屋図災害時の心得、明治以後の大地震表、賀田流失浸水家屋地図（小川欽弥、大川藏輝、榎本吉宗調査）

## E. 浪 高 調 査

浪高図表の項へ抽入

## F. 記 念 碑 建 設

### 六、舊 記 輯 録

#### A. 熊 野 年 代 記

成 務 三 年 癸 酉	熊野大浪浦々民屋流
天平勝宝 三 年 辛 卯	六月熊野大地震経三日
延 喜 廿二年 壬 午	熊野大地震山を崩し浦々浪入る
応 永 十四年 丁 亥	十二月熊野大地震三日
慶 長 九 年 巳 辰	熊野浦大浪
慶 安 元 年 巳 丑	熊野大地震
安 政 元 年 甲 寅	六月十三日大地震、十一月四日大地震大津浪 鶴殿、井田、阿田和、市木、有馬、木本流家なし、新鹿、 二木島人家流れ人死す。

B. 反 古 の 綴 (木本喜多草多老著)

伝聞宝永四丁亥十月四日、熊野大地震津浪にて人皆山へ逃居る、木本、井土、有馬、阿田和、市木等へは津浪不入、大泊、古泊、新鹿、遊木、二木島、曾根、賀田、尾鷲、長島、其外東筋浦々、上方へも同前波入申候…木本浦は海上魔見島迄汐引き候而、海中大岩小岩数多見候而、牛の臥たる如くに相見え、暫して浜の中程迄浪上がり候、大泊村人家流失致し、清秦寺計り残り、人も七人流れ死す、新鹿も家不残流失、人式十四人流れ死、曾根は在所半分流失、人無難のよし、同月下旬迄毎日二三度つつ地震する故、家々には山に住居する事凡そ三十日間なり。

○同年(明和七年)十月七日

晝八ツ時地震夕暮れ迄四度ゆる、夜半にまたゆる、朝曇、地震の比曇益々甚し、所に地破石垣崩れ、山より石の落る音甚し、二木島、遊木辺は津浪来るべしとて、四五日山に逃げ居たる由。

○同年十月朔日

曇夜曇り弥々甚しく、不辨咫尺夜更に灰降、甚細未にして浮石の粉の如し、翌二日灰弥々降、四方の山不見、家の中へ吹散、人の目口に入、密室の内と虫?も入さる処なし、八ツ時少し晴て、日光少し見る、夜晴れて星見へ、翌日晴、然れとも灰消せず、海騒がしく波高し。

六日又曇、四方不辨、灰少降、七日晴、灰消せず拂へとも不浄、岩石草木に至る迄灰付いて落ちず。八日夕暮れより雨降終に大雷雨波高し、九日雨歇み灰悉消す、上方は印南辺迄、東方は江戸迄、同日同刻に降、勢州津より上方は不降、大和は佛阪と伝所迄降、昔寛永年中にも灰降よし、凡百四十五年になる、

其節降たる灰、和州北山の或る家に貯へ有よし、此度と同物なり、後に聞くに薩摩国櫻島と云所の山吹出し、大石火に成り、地八尺計降積りし由、人も多く死せりと、櫻島は鹿児島の向の島なる由

○同年(天明三年)七月

信州浅間山焼にて、熊野辺迄地震鳴動す。

○寛政四壬子正月

廿一日より備前國島原の山鳴動焼出候由、此辺まで地震ゆる。

○同年(文化五年)十月十七日

晴天海静にして八ツ時潮干時、俄に汐水溢来、湊より大河の如く遡り、端の下漲り上が

り、忽引忽満、船漂蕩す、日暮弥々甚敷、終夜指引き止ます、当浦人民終夜不寐守り居、諸道具片付逃用意致、暫く二番鶏比静り、翌十八日も少々指引ありて不静。

○天保二年辛卯

京都大地震

### C. 坪田氏地震記録

一. 嘉永七年甲寅六月十三日、晝九ツ時にゆる、同月十五日今暁八ツ時殊大地震、夕方に至り皆々津浪来るべくと心得、用意して諸指道具着類、俵もの等、うへ地辺の家々へ持はこび、誠に大騒動致候得共、津浪来らず、尤も七月迄数度揺、其時の荒は伊賀上野、伊世、四日市、奈良、古市、越前、福井其外外国所々の荒方大方ならず。

一. 同年十一月四日四ツ時、大地震直様津浪来る、家財并貯の金米とも少しも残らず流失、津浪来候体を見るに、池中の水地上に湧くが如く、四ツ時より八ツ時までの津浪、大小五六度も来る、流家竈？数百五十七軒（此内本役廿三軒）死人六人（男一人女五人此内一人は死骸相見えず）牛五疋流失今日の荒方尾鷲浦死人凡三百四十五人、長島浦死人凡三十人余、其他浦の荒様夥し。

一. 同日五日晝七ツ半時、又候大地震津浪少々来る、西の方に当て山のぬける様な音あり、夫より夜に入て数度ゆる、夜四ツ時に津浪少々来る、大空に鉄砲の音なるひびき有、今夜人々野宿致す、今日の地震新宮家々大半倒れる田辺は出火并津浪来る、摂津、大阪、大津人家并舟も其荒方大方ならず、猶九州大荒、東海道筋大荒、尤も出羽、奥州并北國辺は地震少々の由、此度湯峯の湯并川湯とも五十日余も相止り候由、猶其他諸國の荒方誠に前代未聞の天変なり。

当村田地荒れ凡二百石余も波掛申候。

五日の夕方ゆり出し候てより、諸人田畑山に居て、念佛の声夥し、眼前の地獄見ぬ修羅道の如く、夜に入て益々ゆり出し、居ながら往生と覚悟極候程の仕合、よふよふ六日の暁方より少し相和らぐ。

当村に於いて家財流失の者へ、木本表より廻米を致し、十一月五日より廿三日迄の間、庄屋許にて一人前一日米三合当て養、此度の地震にはきじの声四方にこたへ、猶亦井戸に水有りや、以後此義可心得事也。

津浪より年暮れ迄、海の汐当浦辺三尺程増候事、右の篠々有増相しるし置也、向後子孫に至迄若し地震有之候はじ、少しも猶予なく上地辺へ逃可申事、此程の地震には片時も過ぎずして津浪来る、当度の荒方はいふに及ばず諸人不自由筆末にしるしがたければ略之

年號 嘉 永 七 年 改 て 安 政 元 年 と 成

丁 亥 十 月 四 日

新 鹿 村 庄 屋 新 宮 屋 藤 十 郎

同 肝煎 津 屋 嘉 左 衛 門

宝永四年に津浪有之候由、当年迄百四十八年目なり。

#### D. 安政元年海嘯時蹟 (尾鷲若林多中著)

##### 津 な み

嘉永七年甲寅の夏六月十四日大地震ありて、在中こぞって程遠き所へ逃げ延び金銭衣類はいふに及ばず、諸道具を持ち運び、中村山に小屋をしつらひぬ、其時余が書記したる物あり、宝永四年の事を手本にして、驚くべからずと思ひ、且つ沢典学といへる儒者が、宝永山湧出たるあぶきの来るなれば、其後つなみといへる事あるべからずいひし事をも書記し、且地震の響を考えしに、西北の北より鳴動して来りければ、戌亥の方に地震の本ありて、此近辺は畢意そのとばしりとおもへるが故に驚かず、米粒衣類一つをも、他へ持ち運ばずしてやみぬ、さはあれど、天地の変測りしるへきにあらされば、若大地震ありて、津浪のあるほどならば、地鳴甚しかるべし、その時津浪と心得逃るならば、第一米銭帳面の類を持ち、其余ゆとりあらば、小屋かけの料に戸障子の類を持ち出すべし、必慾に雑具等に目をかけて、命を失ふべからずと記せり、此書たる者在中に写し取たる人もあるべけれど、今度の波に流失したるべし、当時宮の後に居住する宮崎氏の方にあるべし。

扱家内のもの江心得の為にいひしは、若つなみにて逃れるときは、寺町通りを祐専寺の地内より、裏の木戸を通り、畑より眞一文字に中村山にのがるべしといひきかせおけり、よって家内の者右のとふりに逃延しなり、今年霜月四日のつなみの有さまは、百四十八年前のつなみの事を、小河氏の記せしとは大同小異なりき。

我等朝飯を喰ひて、少し考える事ありて、地震甚しく大に震ひ出せし故、家の倒れん事を気つかわしく、裏に出んとせしに、水壺の水ゆり溢れ、棚にあるもの転び落、薪の積たるは崩れ、いかがはせんと怖しく、裏に出るに、橙の木ありけるが、其あたり地拆て彳むへき所もあらず、嫁孫下女等一つに集ひ悲みけるをなだめすかし、少し穏になりけるとき浜へ追ひ遣りて、兎角家のたふれて失火のあらん事を恐れ、竈<sup>？</sup>に水をそそぎ、火鉢手爐煙草盆など、都て火のある物を裏の中央に出し、直に浜に出て近隣の人々と地震や止む、つなみや来ると評議しける事半時には足するに、投石島 (はだか島、毛なし島ともいふ) より半町はかり沖へと思ふ海面より、潮の湧出るさま、あかみをおひて追々強くなるにつけ、人々つなみなることを知りて詞を伝へ、追々に我も人も逃出しぬ、平正心得たる如く、寺町を結専寺の庭より直ちに畑に出で眞一文字に中村山を逃登りぬ。

我嚮に浜に逃れんとして裏より部屋を見るに、仏壇の花瓶を初め、其外の道具もこぼれ出てありし、その時心得て巾著の入れたる懸硯箱を持出し、井戸へ投しおかば事名なからましに、その所へ気のつかざるは、元来つなみといへる事は、めったにあるまじとおもふ所、心の底にあると、地震に周章たるとの故なり、あさましき事なり。

扱浜より逃れもて我家を見れば、大戸をしめてあり、戸を開けて近き所にある物を持ちやと思ひしが若ひまどりて流死せば末の代まで人の謗をうけん事とおもひて、其俣逃延ぬ、此戸をさしたる者を尋ぬるに、愚息俊藏なるよし、我等浜よりの逃るさに戸を明おきなば、

小遣ひ其外手近にある者を持つなどしてひまとりなば、いかなるあやまちあらんと思ひかりしなりといひき。余は正月三日より持病さし出て、平臥かちにて、十月中旬漸く世間に出たれば、気力乏敷寝巻の上に襦袢胴着綿入れを着て、細き眞田を帯として、其上にかいまきを着て、又細き眞田を帯としたる俣逃たれば、歩行にむつかしくありし俊藏は五歳の小児を抱き、嫁のていは乳呑子を抱き、兄弟の子女并に辻本氏の子女をを引き連れ、下女諸共其先に逃ぐ、つづいて我等夫婦逃げるが、兎角余は跡にさかり、畑中にてかへり見れば、波の鼻二百間ばかりに見江ける、又顧みければ百間は五十間にせまり波浜のとまりたる所を見れば、三十間ばかり隔たるとおもへり、されど波鼻のありさまを見るに、一向けはしくなかりし、たとへば盥水を打ちあけたる如くなれば、波はなより七間や十間の間は、せいせい膾のあたりまで深さあるべしと思ひて、人に語りければ、人もさこそといへり、逃げもて息づくひまに、北の方を見れば、ぐはらぐはらと音して土埃夥しく、家土藏碎ながら漁舟廻船も交わりて、やが上に計知河原を浜るさま、気も魂も消るばかり怖しかりき、さて中村山に登り、愛宕秋葉の間に憩ひて東方を眺るに、廻船数艘順風に帆をあげ、遙かの沖に渡りぬ、されば大洋より大浪の来るにはあらず余愚ながら考えるに大地の底地震にて裂地の下の水追々湧出るものと覚ゆ、譬へば堀抜井戸を百も二百も一時に堀たるやうのものならんか、佛経に茂城といふ所に水のなき時、羅候羅尊者が右の手をそろそろ地中に入れたれば、金輪際より水迸り出るものと覚ゆ、津なみおさまりて後ち、漁師にいへるに、大曾根浦の前辨才天社のあたりに船を流しめたるに、地震ゆるやかになるとひとしく、四斗樽ほどの水のかたまり爰彼に数十塊わき出たるゆへ、ただ事ならずと心得、疾く逃帰りしと語れり 此所外々に波の湧出るを見しもの数多あり、追々湧重て溢るる故に、遂には急流の如く溯と覚ゆ、前にいへる如く、波の鼻のゆるやかなること、盥の水を打ちあけたるやうなありさま、是にて考ふべし、また海中はかり水の湧出るは海中は地の底薄きが故ならんか、又津なみの起りは、辰の下剋なれば、波の睦に入たるは潮の満るにつれて、込入りたるものか、又湧出る水の勢自然と西へさかのぼる道理か余は知らず、天地陰陽の理を極めたる人は能知るべし、余前に子孫のために書記たるものには、津なみの跡は河原となるべし、犁鋼等の農具あるものは田畑を耕作して飢を凌ぐ便あるべし、漁事などの事は船も漁職も流失して、漁のよすがもあるまじと書きしがさにあらず、中村山より見るに、なみはひとと直ぐに浜へ出て、諸品拾ふものあり、小船にて拾ふもあり、流れ残り所々の屋敷は、堀溝などにある米麦の俵、其他味噌醤油香の物油等初め、金銭衣類一切の家財に至るまで拾ひとり、きのふまで日々の糧、夜具衣類等に乏しかりしものも、小屋には住めど暖かに着、あくまで喰ひ、何不足なくなりぬ、此時にあたりて一統に人心常にことなる事ありときこへぬ、浅猿しき事ならずや、されは在中に大地震あるはいふに及ばず、近在近国に大地震あらば、兼て用心して米麦衣類其外家財等をも、遠き所へ持運びおくべし、さりながら地震のゆりさまを考えし、強大地震のゆれはとて、逃げ支度も愚慮の？といはんか、今年の大地震は日本國中の内、六十州までゆりたるといへる人もあり、土地の崩れ人家のつぶれ、津なみ人の死傷などの事は、難破の有枝といへる人の、夜直り草紙と題

せるものに大概を記たるものを見たり。

一、我が子々孫々のもの等、衣食住に奢らず、節儉を本として、及ばぬ事ながら、手遠き所へ小屋をしつらひおきて、平生に心得て、近國に大地震あるか居在はいふに及ばず、郡中などに地震しばしばあらば、手遠きところへ、衣類道具米麦の類持運び置たきものなり。

一、流死人 百六十三人

内

十七人 南浦、 七十一人 林浦、 七十一人 中井浦、 三人 堀北浦、  
一人 天満浦、 外に三十一人 旅人並に他所より来る峠人凡百九十四人  
波のあかりたる最大概を記す。

一、林 仲氏並常声寺への通道角迄

一、堀 弥宜町より金剛寺への通道より一町はかり

一、今迄柏町への通道少し不迄

一、畑中畔本道通限り

河筋波鼻

一、中川 杉の瀬まで 計知川 坂場まで 矢の川 桧の谷出合まで

一、北浦 皆流失 橋落る

一、氏神 無難

一、矢ノ浜 地下藏の下まで二十一軒流失 氏神社流失 圓通寺半潰

一、水地 無難

一、天満 十二軒流失

一、長浜 十 軒流失

一、向井大曾根松本 何れも無難

漁船流れ登りし所

御制札場に一艘、念佛寺の後畑中に二艘、今町に盪送船一艘、漁舟二艘、柏町に一艘、堀に一艘、此外破傷の船数十艘、沖に出居たるは無難、されど雀島内に居たるは、破損の家藏の流物或は諸道具、杉桧材木の流失等にせがれ、甚だ危ふかりしといへり、必船に乗りて逃べからず。

一、廻船 八十石積のイサバ下り阪へ流入、  
三百石積の船八幡山の麓稻荷神社の側に流入

寺

一、金剛寺 鐘楼并に薬師堂大破 金毘羅堂梵盃石表門流失 石垣悉崩る  
本堂庫裏床より上三尺はかり水あがる。

一、念佛寺 観音堂并に隠居所流失 庫庫大破 石垣悉く崩れる

一、祐専寺 本堂無難 庫裏大破 石垣悉崩る

一、光圓寺 安性寺二ヶ寺とも皆流失

一、常声寺 良源寺二ヶ所とも無難

破損軽量さまざま

流残りたる分

一、高町は新町へ通る角より浜通り角まで両側残る、新町へ通る道にて一軒残る。

一、袋町は高町へ通る角ちかきあたり、豎横丁にて納屋借家とも十軒はかり残る。

一、世古町四軒残る

嘉永七年甲寅十二月 若林多仲識

因にいふ

津なみの跡は人の心いつれも皆賊心おこり、ひそかに他人の物をうはひとり親兄弟の礼もなく、正直なる者をはあほふの如くおもひ、誠に言語にたへる事どもばかり也、小前のものともはいふもさらなり、中分以上の人々もみな賊心にて、おそろしき世となり、尾鷲浦にて漸く五七人正直な人ありと覚えし、誠にあはれなることともなりき、我等は七十才俊藏は壮年なれとも、正直にそたれば、家財の流れ残りたるものも、皆人にうばはれ、みな人の物となりぬ、南本町少し東へ入所、辻本屋敷辰五郎屋敷との間に、つぶれ、家の流れ集まりたる中に、菓箆筥ありて、飴屋孫慶松并に下男等掘出し、三つ外に引出し箱両掛の菓箱本箱六つ取出し呉れたり、去ながら、本箱はことごとく戸を失ひ、書物みな汐入りになり、且橋本多く泥水等にて、間にあわね物多かりぬ、菓箆筥は引出し一つも失はず、引出に汐のいらぬ物多く、治療するに大に都合よかりし、是ひとへに先祖神明の助ならんか、さて津なみ引納りなば、家土藏納屋などの、沖に流れ出、或はばらばらに破れたるはせんかたもなければ、在内にそのまま潰れひしげてあるやなしやは、見歩行せんさくすべし、限にあたらば人夫かけて穿ち堀へし、家財必有べし、此心得肝要なり、既に我等納屋中井にてつぶれたりと見へて、さる家に我等紋所のある衣類を見て、ひそかにせんさくして、絹の物はかり七つかへし貰ひぬ、納屋の二階の箆筥長持には、衣類の襟数五六拾もありたる云々（以下略之）

#### 附 記

又尾鷲南浦に於いて調査せし安政度の海嘯景況の上申書あり、其状況前に異ならずと<sup>?</sup>も、接続村の流亡人数人員左の如し、

其時の大庄屋土井八郎兵衛より、直使を馳せ、旧藩の役所へ事情申立てられたれば、銀拾貫七百九十匁五分と、錢三百八十貫二百文、家木料として尾鷲組四ヶ在へ御救助下され、一同有がたく拜受せり、又大庄屋役土井八郎兵衛より、米三十石と荒布六百貫目余を救助したれば、一時糊口を凌ぎしなり。而して、当時大庄屋初め、庄屋肝煎組頭の物四ヶ月間計も、日々巡回して取締を為し、追々仮住居をして職業を操ることを得、遂には家屋を建並て現今の姿とはなれり。

当時の戸数及流死者等下の如く、実に宝永以来の災害となり

尾鷲中井浦

元堀北浦	戸数九十三戸	人口四百五十六人		
	内 半流失五十戸	半潰十九戸	浪入十四戸	死亡五人
元野地村	戸数百十五戸	人口五百八十六人	内浪入二十六戸	
元中井浦	戸数三百七戸	人口千二百五十人		
	内 流失二百八十七戸	死亡七十九人	外旅人死亡二十五人	
尾鷲南浦				
元南浦	戸数二百三戸	人口七十人		
	内 流失百九十九戸	死亡二十三人		
元林浦	戸数二百二十戸	人口七百二十七人		
	内 流失百五十一戸	半流失六戸	死亡五十七人	
	外旅人死亡十一人			
天満浦	戸数三十五戸	人口百六十八人	内 流失二十四戸	半流失十二戸
元水地浦	戸数四戸	人口十六人	但無事	
矢浜村	戸数百五戸	人口六百二十人	内 流失二十一戸	半流失三戸
向井村	戸数五十八戸	人口二百七十二人	但無事	
大曾根浦	戸数二十五戸	人口百八十五人	但無事	
行野浦	戸数三十三戸	人口百四十八人	但無事	
九木浦	戸数百六十戸	人口六百五十六人	内 流失二十七戸	
	半流失六十三戸	浪入二十七戸		
須賀利浦	戸数百二十戸	人口四百七十三人	内流失二十四戸	
	浪入四十一戸	破損三十一戸	死亡一人	

## E. 地震聚報

大震後小地震の続きたる例

- 一、皇極天皇元年十月八日、大和國地震ひ、動搖晝夜を分たず、同月十四日に至り、漸く靜穩に帰す。
- 一、天長四年七月十二日、京都地大に震ひ、多く屋台を倒す、一日大震一度小震七八度、之に次ぎ十四日より月末までには凡一時間に一度振動せり。
- 一、貞元元年六月十八日、京都地大に震ひ、其響雷の如く、宮城諸衛多く破壊し、十九日振動十四度、二十日十一度余震翌日に及ぶ。
- 一、文治元年七月四日、京都地震ふ、山崩れ海傾き、屋舎破壊の響きは大雷に異ならず、強烈なる振動は二三十回に及び、其の余震は三月余に及ぶ。
- 一、永享五年九月十六日、京都大震す、夜中三十余度に及び、其後二十日余日地震止ます。
- 一、寛文二年五月朔日、大地震す、近江殊に強く、山崩れ家埋まり、人多く死す、振動は初日より三日間迄は日々三十回計りにして余震漸く減少せしも延て月余に及べり。

- 一、宝永四年十月四日、東海道の諸國大地震し、又海嘯の為に命を失ひしもの頗る多し、就中大阪は大破損に及び、死亡三万余人あり、同月中は時々、軽震ありたり。
- 一、宝暦元年二月二十九日、京都地大に震ひ、社寺屋舎大に崩壊す、其後度々地震し六月迄已まず。
- 一、文政十一年十一月十二日、越後地大に震ひ、損害死亡甚だ多し、此日大震の後翌佛曉迄に十九度、十三日中に八度十四日に七度、十六日より十八日まで晝夜七度、廿八日迄振動あり。
- 一、天保元年七月二日 京都地大に震ひ、京中至る所損害を受けざるなく、人畜多く圧死し、潰家よりは火を發せり、十余日を経過するも、小震は半時位を隔てて之ありたり。
- 一、弘化四年三月廿四日、信濃國地大に震ひ、山崩れ川塞ぎ、潰家二千四百死者二万余、五月下旬に至るも猶止まずと云ふ。
- 一、安政元年十一月四日、駿河、三河、遠江、伊勢、伊賀、摂津、藩広及四國に地大に震ふ、就中土佐も烈しく、全月より翌年十二月迄、十四ヶ月間に總震数八百十七回にて、十一月には二百四十七回に及ぶといふ。
- 一、安政二年十月二日、江戸に於ける大地震の慘酷なりし事（欠字）全夜は引続き三十回の劇震ありしも（破れ欠字）其後数日間は日々十数回の小震あり翌年十月に至るも振動す。
- 一、明治二十二年七月二十八日、熊本地大に震ひ、延て八月（破れ欠字）鳴動百七十一回あり、其の後数ヶ月間は其回数減少せしも、振動全く已まざりしと。

## F. 其 他 の 古 文 書

### 七、講 演 集

此の一文は、東京帝大地震研究所並震災予防協会囑託武者金吉先生が、震災記念式の際に送って頂いた講演の原稿を取捨し、先生の著述の中からも取入れ自分の考や他の古文書からも材料を集めて、書き改めたものである、若し誤りがあつたとしたら、其は筆者が負ふ責任である、読者諸君諒とせられよ、尚演題も勝手に『紀州地震記』と改題した。

### 紀 州 と 地 震

#### A. 大規模地震の発生地

我國は世界一の地震國でありまして、有感地震だけでも年々千八百回位起こります。即ち一日に約五回の割合になります。その中には家が倒れ人が押し潰されるような破壊的地震が少なく、特に近年は殆ど毎日のように大地震が起こって、甚大な損害を生じました。

日本書紀を繙いてみますと、推古天皇七年（西暦五九九年）大和國に大地震があつたといふ記事があります。これが我國の記録に残っている最初の大地震ですが、然らばそれ以前に我國に地震が無かつたのかと申しますとそうではありません、書物の上には現れてい

ませんが、地震のあった**證據**が、処女形のまま少しも破壊されずに、実物として我が紀州熊野の地に、歴然として残されています。

其れは木本町の東に突出している鬼が城であります。鬼が城の岩質は、鬼柳影と申しまして、割合軟らかい質の石であります、外側は堅い様に見えるが中の方は指でこすっても、ボロボロ落ちて来る程であります。それが長い年月の間雨に打たれ、風に晒され、汪様として寄せ来る熊野灘の荒浪にぶつつかつて、其の水際の処に岩窟が出来ました、所が何時の時代かに起こった大地震によって、突然隆起をいたしまして、洞窟は高く飛び上がってしまいました、そうして幾百千年を経ている内に、再び汀線に洞が出来た処え、更に発生した大地震の為に、又々隆起作用を起こしまして、現在見るような形**?**を顕しています。

脇水博士の測定によりますと、最も高い段丘で、水準面から三十七米あるといわれていまして、之が熊野沿岸が大昔大地震に見舞はれたという、何よりの證據であります。

処で近年におきましても、百人以上の死者を出した大地震は、明治二十四年から昭和二十三年に至る五十八年間に十五回程も揺っています、丁度四年に一回の割合で発生していますが其の内には大規模地震も六回程あります、之も十年に一回の割合になって居ります。

次に掲げた表は、被害の大きい順に挙げたのであります、又○印は大規模地震であります。

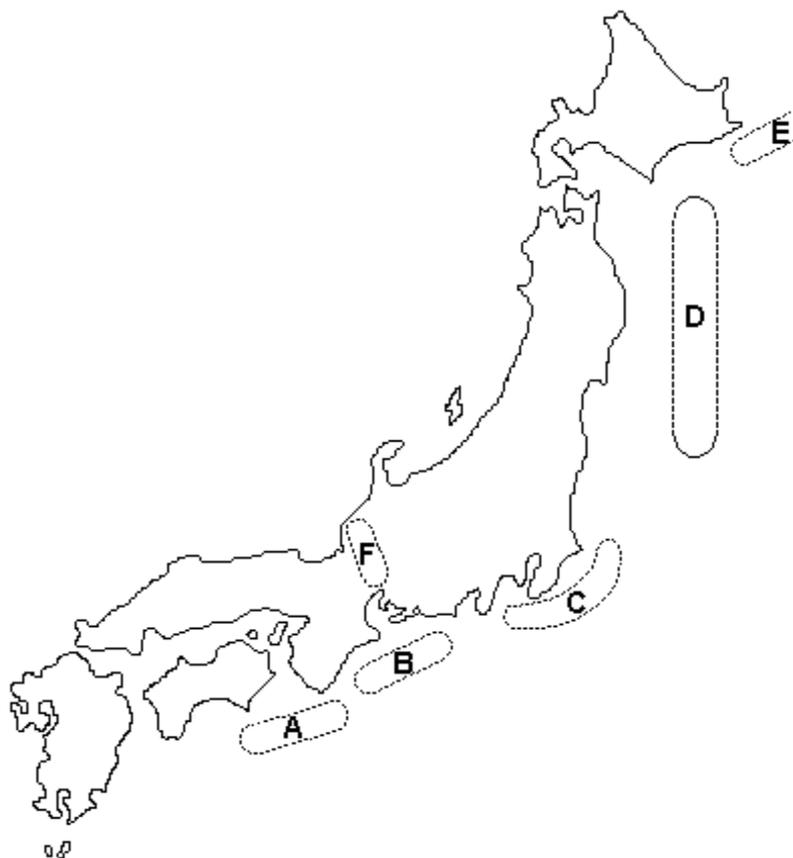
○大正十二年九月一日	関東地震	九九三三一人
○明治二十九年六月十五日	三陸津浪	二七〇〇〇人
○明治二十四年十月廿八日	濃尾地震	七二七三人
昭和二十三年六月廿八日	福井地震	五五五五人
昭和二年三月七日	丹後地震	三〇一七人
○昭和八年三月三日	三陸津浪	二九八六人
昭和二十年一月十三日	三河地震	一九六一人
○昭和二十一年十二月廿一日	南海道地震	一三〇二人
昭和十八年九月十日	鳥取地震	一一九〇人
○昭和十九年十二月七日	東南海地震	九九〇人
明治二十七年十月廿二日	庄内地震	七二〇人
明治五年二月六日	石見浜田地震	五三七人
大正十四年五月廿三日	但馬地震	三九五五人
昭和五年十一月廿六日	伊豆地震	二五九人
明治二十九年八月廿一日	陸羽地震	二〇六人

破壊的地震には大規模のものと局部的のものとあります。先年の福井地震や丹後地震は、震源地に於ける震動は極めて激烈ですが、震動を感じる範囲は比較的せまく、即ち局部的

の地震であります。それに反して東南海地震とか、濃尾地震のような地震は、地震動を感じる範囲即ち地域が極めて広大でありますから、大規模地震と申して居ります。南海道地震の時には其の損害を蒙った地域は、一府二十四懸に亘って、我國の約半分に近い範囲であります、近年我國に発生した大地震について、規模の上から申しますと。

昭和八年三陸沖、昭和廿一年南海道、昭和十九年東南海、大正十二年関東地方、という順序であります。

処で色々の点から調査研究した処によりますと、大規模地震の発生する地域は、次の図に示してあるように、A、B、C、D、E、F、即ち南海道沖、東海道沖、相模湾房総沖、三陸沖、釧路根室沖、それから濃尾地方の六ヶ所に限られていまして、外の地域に発生する地震は其等の地域から発する大地震に比べますと規模が小さいのであります。



#### B. 紀州に被害を生じた地震

次に本論に入りまして紀州と地震について申し上げます。古来紀州及び其の附近から発して被害を生じた地震を挙げて見ますと、次の通りであります。附近と申しても遠州灘や土佐沖まで含んで居ります。

- (1) \*天武天皇十二年十月十四日 (2) \*仁和三年七月三十日
- (3) \*延喜廿二年 (月日不詳) (4) 長暦元年十二月十七日
- (5) \*永年元年十一月廿四日 (6) \*元弘元年七月三日
- (7) \*正平十五年十月四日 (8) \*正平十六年六月二十四日
- (9) \*応永十年 (月日不詳) (10) \*応永十四年十二月十四日
- (11) 康正元年十二月廿九日 (12) \*明応七年八月廿五日
- (13) \*永正七年八月八日 (14) \*永正十七年三月七日
- (15) \*慶長九年十二月十六日 (16) \*宝永元年 (月日不詳)
- (17) \*宝永四年十月四日 (18) \*安政元年十一月四日
- (19) \*安政元年十一月五日 (20) \*明治廿二年三月七日
- (21) 明治四十四年六月十日 (22) 昭和五年二月十一日
- (23) \*昭和十三年一月十二日 (24) 昭和十五年十月十三日
- (25) 昭和十五年十一月十八日 (26) \*昭和十九年十二月七日
- (27) \*昭和廿一年十二月廿一日 (28) 昭和廿三年四月五日

さて右に記した地震を發した地点を調べて見ますと、大別して内陸と海底になります。即ち紀伊半島の内部から發した地震と、紀伊半島附近の海底(熊野灘、紀淡海峡等)及び隣接市域の海底(遠州灘、土佐沖等)から發した地震とに分つことが出来ます。前記の地震の中\*印を附したのが即ち海底から發した地震です。

紀伊半島の内部から發した地震はすべて局部的なもので、大なる被害を生ずるようなものはありませんでした。それに反して遠州灘、熊野沖、潮岬より土佐沖にかけての海底から發する地震の中には極めて大規模のものがあり、必ず大津浪を伴ひ、沿岸地方に非常な損害を与えます。斯様な大規模の大地震は幸いにして頻繁は起こりません。平均百年位の間隔をおいて起こります。併し一度斯様な大地震を發しますと続いて起る傾向があります。古い時代の地震は資料が多く残って居りませんから除きまして、比較的新しい時代のみについて申し上げます

<	正平十五年 (熊野沖)	}	間隔約九ヶ月
	正平十六年 (紀伊西方沖)		

＜	慶長 九年	(東海道沖)	}	同日
	慶長 九年	(南海道沖)		
＜	宝永 四年	(東海道沖)	}	同日
	宝永 四年	(南海道沖)		
＜	安政 元年	(東海道沖)	}	間隔三十二時間
	安政 元年	(南海道沖)		
＜	昭和十九年	(新宮沖)	}	間隔二年
	昭和廿一年	(潮岬南西沖)		

上のように先づ東の方から大地震が起こり、ついで西の方から再び大地震が起こります。しかも二回目の方が一層大きく被害も大きいのが普通です。従って二つの大地震の震源の中間にある地域では、第一の地震の後一二分から一二年の中に一層大きい地震、津浪に襲はれる事になります。紀州沿岸、特に熊野地方は丁度斯様な位置に位して居ります。

次に往々地震に伴う津浪について申し上げます、海底に地震が発生し海底が陥没したり隆起したりする場合に、直上の海水を中心として、数十分の周期を持った波、波の高さに比して波長の長い波が伝わって、八方に拡がります、之を津浪と称するのであります。

明神鏡という本に、一応永二十七年七月二十日、卯時よりも巳の時まで、**丑?**子相賀塩干事九度魚多く打上げられる一という記事がありますが之れは鹿児島灘の地震の時の事で、卯刻は午前六時、巳刻は十時ですから、波の周期は三十分であった事が分かります。

波高は初めは小さいが、数千米の深海から、急に数百米数十米という浅海に入りますと、段々高さを増し、湾の奥の狭い部分に侵入すると、時として非常な高さの浪になります。

津波のため甚大な損害を蒙るのは次の二つの条件が備はっている場合です。

即ち (一) 附近の海底が大地震を発する温床であること 及び (二) 海岸の形がリアス式であること。不幸にして奥熊野地方の如きはこの二つの条件を備えて居ります。

リアス式海岸でも特にV字形の湾の奥の部分では浪が非常に高くなり、従って被害も大きくなります。複雑な形の湾の場合には浪が何回か岸に衝突し反射するので、湾奥の被害が軽いこともあります。リアス式海岸の湾の奥では平地の面積が極めて狭いのが普通ですが、賀田の場合には平地が比較的広く、従って人家も多かったのが大被害を生じた一つの理由でせう。類例には尾鷲や新鹿があります。二木島などでは波は高かったが湾の奥に平地が殆どありません。従って被害が比較的軽かったのです。併し安政の津浪の波高を標準にして建てた役場は、宝永程度の津浪が襲来すると流されること請合いです。

賀田でも深津呂の家が流れないのに、ずっと奥の山王神社下の家が流れ居り、二木島でも一番奥の学校が流失しますし、曾根でもあんな処がと思われるような奥まった処まで波が入って居ります。

昔から津浪とは良く云ったものです、津と云うのはミナト即ち良港湾の意味で、宮津、

魚津、唐津、焼津、大津皆海か湖かの、水に面した港であります。宝永の津波でも安政の津波でも。港の形態を備えていない、木本以南御浜筋には少しも損害を受けて居らず、泊、新鹿、二木島、賀田、曾根、尾鷲、長島辺に損害が多かったのであります。

紀州は地震や津波とわ切っても切れぬ関係がありまして、被害を受ける事が大きいのであります、実に困ったものです。誰やらは紀州は産物を以ってすれば木國であり、景色を以ってすれば奇の國であると評した事がありますが、地震や津波から云えば、又危の國であります。アブナイ國であります。

### C. 地震及津波の災害軽減法

然し地震や津波わ、何んな力の強い人達が、何十万人かかっても之を止める訳にはいきません、如何なる科学の力を以ってしても、地震の発生を未然に防ぐ事は絶対に不可能であります、が然し我々に対策如何によっては、地震や津波の被害を最小限度に喰ひ止めることは不可能ではありません、然らば如何なる対策を講ずればよいかといえ、地震の予知、浪災震害予防施設、地震知識の普及とゆう事になりましょう、以下順を追うて申し上げる事に致します。

#### (1) 地震の予知

大地震の起こる時と、場所と其の程度が、予め正確に分かりまして、天気予報のように一般に伝える事が出来ますならば、少なくとも死傷者の数を減少する事が出来、火事など起きない様にすることが出来ますが、遺憾ながら今日の地震学は未だ其の域に達していません、然らば現在の処地震の予知は全然不可能かと申しますと、そうでもありません、或る程度の予知は出来るのであります。

十七世紀以後に起こった太平洋側の海底から発した地震を調べて見ますと、例外なしに北西から南西に向かって地震が移動している事が知られるのであります。

1. 一六七七年三陸沖・一七〇三年房総沖・一七〇七年東海道沖・同年同日南海道沖
2. 一八四三年根室釧路沖・一八五四年東海道沖・一八五四年南海道沖
3. 一八九四年根室釧路沖・一八九六年三陸沖・一九二三年相模沖

前の二回の例から推測すると、三回目は相模湾で止まっているのですから、次は東海道沖、その次は南海道沖から大地震が起こるであろうという見当がつくのであります。

其れから大きな地震の発生した年代を調べてみますと、地震と地震との間が前に記しましたように大抵百年位の間隔を置いて発生しているようであります。

正平十六年(此間百廿七年)明応七年(此間百〇七年)慶長九年(此の間百〇二年)宝永四年(此間百四十七年)安政元年(此間九十年)昭和十九年(平均百十七年)

然も夏よりも冬に於て地震の多いことは統計の示す所であります。

地震と云うものは、突発的に何処にでも発生するものではありません、常々から土地の

動きつつある場所に発生するものでありますから、精密水準量と申します土地の極めて微小な上がり下がり調べの測量を、同じ地域に於いて繰返し執行することによって、或る地域が比較的著しい地形変動が進行しつつあるという事が判明いたします。

斯ういう風にして厂的調査と、精密水準調査を行う事によりまして、近き将来に大地震が起りそうな土地を探し出すことは決して不可能ではありません。

東海道沖及び南海道沖から発生する大地震に関しましては、室戸岬地域では潮岬という太平洋に突出している部分は、平時に於ては南下りの傾動を示しています、即ち次第次第と沈下が行われていますが、大地震の起こる前になると、反対に少しつつ隆起を初め、大地震と同時に南上りの傾動を初める習慣があります、それで検潮儀と称する器械を要所要所に備え付けて、海面の上り下り、云い換えますと、陸地の上り下りを観測する事によって、或る程度迄、大地震の発生が近づきつつある事を予め知り得る可能性がある訳であります。

故今村博士が、渥美半島、串本、周参見、高知等之検潮儀を設置したのも、其の為であったのでありますが、戦争の最中で資料が不足して、観測を中止せねばならなくなったことは、返す返すも遺憾なことであります。

只今申延べました様な方法で、大地震が近き将来に起りそうな土地を発見せられました場合に、次に取るべき対策は、地震の愈々発生するという直前に現れる色々な前兆を捕捉して、地震の予報を出す参考にすることです。

大地震の前兆には色々ありまして、前に述べました紀伊半島や、室戸岬の傾動が反対に現れて来ると云う事も其の一つであります、尚其の外にも色々な前徴が顕はれる事があります、然し其れ等の前兆は必ずしも現れるとは限っていません、顕れる事もあり、顕れない事もあります、今地震の前兆に就て少しく延べます。

#### (イ) 地雷流地磁気の変化

土地の中を流れている弱い電流の電位が、大地震の前に急に変化する事があります。東北大学の観測によりますと、関東地震の二三時間前から、地電流の変化が初まったとゆう事であり、地磁気の変化も発震前に現れる事がありますが、昭和八年三陸沖津浪の場合には、其の前年の末から既に変化が認められたという事です。

#### (ロ) 土地の傾斜の変化及び伸縮

石本博士の作った、シリカ傾斜計は、一キロメートル先の点が、一ミリメートル上り下りしても記録できるといわれています、斯の様な器械で土地の傾斜を計る事によって、地震を予知する可能性がある訳であります、次には通俗的な皆さんにも分かり易い事柄に就いて申し上げます。

#### (ハ) 地 鳴

大地震の前に地鳴りが頻繁に聞こえる事があります、明治二十四年濃尾地震の前に、震源地附近では砲声の様な音が晝夜を分かたず聞こえるので、土地の人は各務原で砲兵が演習しているのだと思っていたそうであります。

地上で地鳴りが聞こえなくとも、井戸の中で地鳴りが聞こえる事があります。安政二年江戸地震の時に、其日の晝深川辺で掘井戸を掘ろうとした処、地の底が鳴って仕事が出来なかった（武江地震の記）という事であります。又利根川の畔の市川では、二日の日に井戸の中に身を付して聞くと、屢々地鳴りが聞こえた（赤松宗且利根川図誌）という事でありますし、昭和十八年の鳥取地震の時にも、こんな例があります。

紫雲荘編纂天才予知法という冊子の中に、『ジャンは不漁の知らせ』というのが載っています、高知の漁師は、海や川の水底が破れ鐘そ打つ様に鳴ることがあるが、之をジャンと云って出漁中でも帰ってきます。寺田虎彦先生の怪異考にある、孕のジャンの事でありましょう、同書には「土佐の金色物語」を引いて、出漁中に此のものが海上を歩き過ぎると、即ち漁騒ぎ走りて時を移すとも其夜は少しも漁がないと云っています、之は地鳴りによって、短周期の弾性波であり、其れを魚が感受して、其の附近から遁走するのであろうと云っています。

橘南溪の東遊記に、東蝦夷の海に『オキナ』という魚があつて、体の長さは二三里に及び、春は南に下り、冬になると北の方に去る、此の魚が来ると海底が雷の如く鳴って、風無き波浪起り、鯨東西に遁去る、斯かる時は漁師も早々逃帰るとゆう、と書いてありますが、之も孕のジャンと同じく、海底から発する地鳴りであらうと思われます。

## (二) 地下水の異常

安政二年江戸の大地震の数日前に、浅草藏前の或る家の土間から滾々と地下水が湧き出した事があります。之れ程著しくないにしても、井戸の水が急に増したり減ったり、或いは濁ったりする事が往々観察されます。

温泉も亦大地震の前に著しい変化を示す事があります、大正十二年関東地震の直前、即ち九月一日の午前に、伊豆山の温泉が急に濁ったと云う事があります、又熱海の間歇温泉は老衰して、全く噴出を止めて居ったのが、大地震の前日突然大噴出を致しました、それから山陰道の三朝（ミササ）温泉の温度が急に増しました。鳥取地震の前にも温泉が濁ったと云う事であります。

## (ホ) 前震

大地震の前に、比較的小さい地震が数回或いは数十回、それ以上も起こる事があります、之を前震と申して居ります。

安政元年六月十五日伊賀上野辺りから発した地震の三日前から、小地震と地鳴りが起こりました。又明治二十九年陸羽地震尾場場合には、八日前から多くの地震を発生して居りますし、昭和五年伊豆地方の地震の前震は、二千三百五十八回の多数を算えました。

## (へ) 著しい地震の頻発

強震程度の地震が数年の間に同一地域から続いて発生しまして、次に大地震が起こる事があります、こんな場合にはよく注意せねばなりません。次の表を御覧になれば分かります。

(a) 明治二十一年四月二十九日	震原東京湾	小被害
同 二十二年二月 十八日	同	同
同 二十五年六月 三日	同 東京湾北部	同
◎同 二十七年六月 二十日	同 東京湾北方	全潰半潰数十、死傷一八一
(b) 同 十八年一月二十七日	岐阜懸武儀郡	
同 二十年二月 二日	伊勢湾附近	
同 二十二年五月十二日	美濃南部	
◎同 二十四年十月二十八日	濃尾大地震	
(c) 大正 十年十二月 八日	千葉懸龍ヶ崎	
同 十一年四月二十六日	浦賀水道	
◎同 十二年九月 一日	関東大地震	

寛政十一年金沢大地震の場合には、二十余年前からその附近に数回の強震、山崩、地沁等が起こって居ります。

#### (ト) 発光現象

発震の時、或は其の前後に一種の光が空中に現れる事が往々あります。宝暦元年越後高田地蔵の前に、海上で漁をしていた漁師が自分の村の方を見ると、空が眞赤になって大火星の様に見えたから、急いで漕ぎ帰って見たが村には何の異常もありません、さては不思議な事であると話しあっている中に、大地震になって村の背後の山が崩れてきて、上名立という部落は全滅、唯一人の女だけ木の枝に引っかかって助かったと云う事であります。

昭和五年伊豆地震の前に現れた怪光現象は、多くの人が目撃しましたが、昭和廿一年の南海道地震の時も、多くの人が発光を観察致しました。

発光の形は、大抵放射状、棒状、球状になって現れるらしいが、発見した人は大抵周章しているのか、観察が不確実なのが多い様であります、若くそうした発光現象が現れた場合には、次の様な点を詳細に観察して報告して欲しいものです。

1. 時刻
2. 形状
3. 見掛けの大きさ
4. 位置
5. 色
6. 移動する速度
7. 現れていた時間

#### (チ) 地気の上昇

享和二年十一月十五日、佐渡の地震の後に、広島某とゆう人が金山を訪問した時、過日の地震で定めし坑も潰れ、人も損じた事でありましょうと尋ねた所、いや此処では地震は前以って分かりますし、先達の地震も三日前から分っていましたので、入坑しなかったから、一人として死傷者はありませんと答えました。それでは、其の前徴はと聞くと、地震の前には坑の中に地気が昇って、傍らに居る人も互いに腰から上は濛々として見えないものであると答えたそうであります(地震考)

発信前に天色濛々としていたという記事は、他にも沢山見出されるのでありますが、やはり地震考に、次のような記事も載って居ります、老男が地を耕すとき、煙を生ずるが如

きを見て、將に震せんとするを知る（中略）又世に伝うるに、雲の近くなるは地震の徴なりと、是は雲にあらずして、地気の上昇するにて、煙の如く雲の如く見ゆるなり、とありますのも其の一つであります。

寛文二年五月一日畿内地方の日にな、朝から天色 濛々としていたという事であります。享和二年、前に申しました広島某という人は、佐渡の小木で、日和を見るべく船頭と共に丘の上に登りますと、船頭のゆうには、今日の天気は誠に怪しげである、四方は濛々として雲が山の腰に垂れ、山の半腹から上は峯はあらわれている、雨とも見えず風になるとも覚えぬ、未だ斯る天氣に遭遇した事がないと云う、そこで広島某は、之は地気の昇る為で、地震の前兆であるから、一刻も猶予すべきでないと云って急いで出立した、果たして道の程四里計り来た時に、山中で地震に逢ったとゆう記事も残って居ります。

天保元年天保畿内地震を、京都の東山で体験した人の話によると、先ず西山何となく気昇ってそれから忽ち市中土煙をたてて揺れるのを感じたとゆう事であります。但し地気とは如何なる現象でまた其れが果たして地震の前兆であるか如何かは分かりません。

#### (リ) 大気現象の異常

地震の前に空の色などが平常と変わったという記事も少なくはありません。安政二年江戸地震の時、或旗本の門番が十月二日の暮頃天を仰いでいたが、やがて今夜は必ず地震がありますと云って、飯を炊き菜を取添えへて用意万端整えていた、とかくするなか果して大地震があったので、主人は門番を呼んで尋ねると、奴は文政十一年越後の三條で地震に遭い、また信州で弘化四年の地震に遭いましたが、三條にいる時、或る博識の人から聞きましたのに、地震のある前には天色朦朧として星の光非常に倍し、温暖なものであると、それから毎世空を仰いで注意していますが、弘化四年の地震の前夜には、星の光が大きくて、昂参の中に糖星まで、鮮やかに見る事が出来ました、処が一兩日前から空の色が変わって、信州にいた時の模様と似ていたので、地震の前兆であると考えたのでありますと答えたという事があります。

天保元年畿内地地震の前日の夕方には、一天朱を流した如く平日の如何様に色濃く候とも、これ程の色は覚え不申云々とあるが、余程著しい色であったと見えます。其後も強く振る毎に夕焼けの色が濃かったという事があります、又主震にあった三日目の朝、東の空が一面黄くなり、其の日には大地震がなかったが、夥しい余震があったとゆうことであります。

元禄十六年関東地震の頃、天野弥五左エ門とゆう老人が、星低く見え冬暖かな年は地震がある云々といつて、家に鎧を打ったりなどして置いたら、果たして其の年に大地震があったそうです。又此の地震の時に、渋川助左エ門という人、之は天文に通じている人でありましたが、今夜大雷か大地震があるでしょうと、御城へ言上したとゆう事ですが、斯る現象と地震との関係は今日明かではありません。

#### (ヌ) 魚類の異常行動

大地震の前に、種々の動物が平常と異なった様子を示したと云う話は、往々聞く事で

ありますが、中でも魚類が発震前に異常行動といっても、色々な種類がありまして、大別しますと次の四種類に分つことができます。

(い) 水面浮上及び類似現象

魚 の 名	地震の年月	場 所	異常行動
ドゼウ	明治廿四年	濃尾	} 単に浮上
ウナギ	明治廿九年	三陸	
海魚	大正十二年	関東	
ウナギ	昭和八年	三陸	
ミズサワラ	全		
高脚蟹	全		
淡水魚	明治廿一年	磐梯山破製	} 弱って浮上
鹹水魚	全廿四年	濃尾	
フナ・コヒ	大正二年	関東	
ボラ	文化七年	男鹿	
ウナギ	明治廿九年	三陸	} 死んで浮上
タラの種類	大正十二年	関東	
鹹水魚	昭和二年	丹後	
モウカザメ	全三年	三陸	

(ろ) 不安の様子を示す並に水面跳躍

ナマズ	安政二年	江戸	} 跳 躍
コヒ	昭和八年	三陸	
鹹水魚	明治卅一年	筑前	
ナマズ	大正十二年	関東	
淡水魚	全	全	
サバ	昭和二年	丹後	
フナ	全八年	三陸	

(は) 沿岸に来群並に大漁

イワシ	安政二年	三陸
ウナギ	全	全
イワシ	明治廿九年	全

魚 の 名	地震の年月	場 所	異常行動
(は) 沿岸に来群並に大漁 続き			
ウ ナ ギ	明治廿九年	三陸	
ウ ミ ヘ ビ	全	全	
マ ス	全	全	
ウ ニ	全	全	
ア ワ ビ	明治廿九年	三 陸	
背黒イワシ	大正十二年	関 東	
イ ワ シ	全	全	
カ ツ オ	全	全	
サ バ	全	全	
ナ マ ズ	全	全	
スルメイカ	昭和 二年	丹 後	
アカエビ	全	全	
エ ノ ハ	全	全	
シイノハ	全	全	
イ ワ シ	昭和 八年	三 陸	
ナメダ鱈	全	全	
メ ヌ ケ	全	全	
サ バ	全	全	
サ バ	全	全	
ア ワ ビ	全	全	
ダボハゼ	全	全	
タ コ	昭和十四年	男 鹿	
マ グ ロ	全	全	
湖 魚	全	全	
タ イ	全	全	
アイナメ	全	全	
アブラコ	全	全	
ゴ イ カ	昭和廿一年	南海道	
サ ヨ リ	全	全	
エ ビ	全	全	
イ カ	全	全	
カ マ ス	全	全	

魚 の 名	地震の年月	場 所	異常行動
(は) 沿岸に来郡並に大魚 続き			
ア ユ	昭和廿四年	濃 尾	
(に) 不 漁			
キ ス	明治廿三年	福 井	
サ メ	全 廿九年	三 陸	
タ ラ	全	全	
ヒメクリ蟹	全	全	
淡 水 魚	全四十三年	有球山噴火	
鹹 水 魚	大正十二年	関 東	
ア ジ	全	全	
カ ツ オ	全	全	
マ グ ロ	全	全	
ウ ナ ギ	全	全	
淡 水 魚	大正十四年	但 島	
鹹 水 魚	全	全	
全	昭和 二年	円 後	
背 黒 鰯	昭和 八年	三 陸	
カ レ イ	全	全	
ウ グ ヒ	全	全	
ナ マ コ	全	全	
淡 水 魚	昭和十三年	屈斜路湖附近	
ユ ゴ イ	全	全	
サ ン マ	昭和廿一年	南海道	
ア ユ	全 廿三年	福井	午前不漁 午後大漁

上の前徴の中で地気の上昇や大気現象は今日の科孝では説明が出来ず、眞偽不明ですが、他の事柄は大地震の全徴と申して差支えないと思います。

次は津浪についての予知を申し上げます。

#### (オ) 津 浪

津波が襲来するかどうかという事を判断することは、中々困難であります、津波が発生(即ち地震があつてから)してから海岸に津波が到着するまでには、少なくとも十分や十五分の余裕があります。然し震央が陸地から近い時には一概にそうとも云えませんが、次に申し上げる副現象によって津波の接近を察知することが出来ます。

☆ 津浪を伴う地震に概し大きく揺れ、且つ長く継続する??????(文字切れ、認識不能(ことが多いのであ?))ります。岩手懸の唐丹(トウニ)村では古来から、地震が長いときは津波の前兆であると伝えています、又三陸方面では地震の際に雉子が鳴けば津浪が無く、馬が嘶けば津波が来るといい伝えています。

之は同地方は、震源が遠い沖合いの海底にある為、震動が緩漫でそうゆう場合には、雉子が鳴かず、反って馬が恐怖して嘶くのでありましょう。

☆ 津浪の襲来する前に遠雷又は砲声のような音をきく場合がありますが、此の場合には津浪が余程接近している兆しであります、又津浪の来る前に発光を認める事がありますが、之れも津浪の接近している事を示すものですから、注意すべきであります。

☆ 津波は引潮で初まる場合と上潮で初まる場合があります、海底に陥没があると引潮で始まり、隆起した場合には上潮で初まるのでしよう。

例えば海底が陥没すると、其処を埋める為に四方八方から浪が寄っていきます、処が其の勢いのために量以上の波が集まり、反対に岸の方の波は余分に引き去られて減って行きます、今度は減ってしまった岸の方を埋める為に、震央近くの浪は岸の方へ寄せてきます、津浪が一回ではなく四回五回と寄せるのは其れが為であります、処が盥に水を入れてそのタラヒを動かすと、中の水はジャブジャブと動揺しますが、二回三回四回と回を重ねるごとに動き方が小さくなるのであります、地震のあった後、一二時間は津浪に注意せねばなりません、二時間たって来なければ、もう大丈夫です。

☆ 津浪が襲来するか否かは、此辺では、山からの地震は津浪がないが、海からの地震は津浪が来るといいます、之は音が山の方に起こった時と、海の方に聞こえた場合のことで、震央の方角をいったものでしよう。

## (2) 耐震建築及び浪災予防施設

### (イ) 耐震建築

今日最も耐震的な建物は、鉄骨及鉄筋コンクリート建築であります、我國に於いては、経済関係や天候等の関係から、凡ての建物をコンクリート建にする事は出来ません、処が都合の良い事に、木造建築は少し注意を拂って建築する事によって、耐震的にする事が出来ます、福井の地震に殆ど全滅した町村で、唯一棟だけ倒壊を免れた家を調べてみたら、屋根が軽くて筋違や方杖を以って耐震的にしてあった家だそうであります。

紀州は地震とは切っても切れぬ関係にありまして、然も海岸地形が津浪に関して危険であります、幸な事には地盤が堅硬に出来ているため、また大地震の震源が海底にある為に埋め立て地以外にあまり家屋の倒壊する事がありませ

ん。従って震災よりも浪災の方が大きいのであります、以下浪害予報について申し上げます。

(ロ) 高地への移転

浪害予防として最もよいのは、高地への移転であります、併し漁業や運漕業の為に、納屋とか事務所を海岸から移すことは困難でありましょうが、住宅や学校或いは役場等は是非共高地へ設けるべきであります、浦神の学校のように、離れ小島の然も外洋に面する側に建設したり、今回校地を上げはしたが、二木島の如く湾奥の川口に学校を設けてあった等は、最悪の位置というべきでありましょう。

学校等は切取地に建てるべきで、埋立地に設ける事は危険なことであります、静岡懸向岳笠村で、昭和十九年の地震の時、山地と平地に建っていた家屋の被害は次の通りであります。

	住宅全壊	住家半壊	非住家全壊
山地	三	〇	〇
平地	一一九	五六	二七七
	非住家半壊	死者	
	一〇	〇	
	二二一	二	

或村の役場は、安政の津浪を標準として安全と思われる位置にありますが、今一步を進めて宝永の津浪を標準とすべきでありましょう。又湾の形によっては、津浪を正面から防禦することは殆ど不可能な所がありますが、こんな処では津浪の進行する正面を避けて側面の高地に移転すべきであります。

(ハ) 防波堤

津浪除けの堤防であります、普通の防波堤は、風波を凌ぐ事が出来ませんが大津波に対して効果の無い事は、尾鷲の防波堤がよく之を證明して居ります、津浪に対して有効ならしめるようにするには、高さも幅も幾倍の大きさにしなければならず、時には第一、第二と段階的に設けなければならぬ場合もあります、そうした条件を充分満足せしめるように作られた防波堤は、大津浪に際して大きな効果のある事は、斯の浜口梧陵によって建造された和歌山懸広村の防浪堤が、昭和二十一年の津浪を美事に防ぎ得た事でも明らかであります。

(ニ) 防潮林

海岸に広い平地がある場合には、海浜一体に之を設けて置きますと、津浪の勢力を減殺する効果があります。但し林の厚みが余りに薄くては効果がありません、岩手懸高田湾

奥に高田松原という立派な防潮林がありまして、其の為に昭和八年の三陸津浪の時高田町は殆ど損害が無かったのですが、近年松原の一部を伐って旅館を建てた処、云う迄もなく此の旅館だけが損害を蒙りました。

#### (ホ) 緩衝地区

津波の侵入を阻止しようとするれば、必然の結果として局部に於ける増水と隣接地区への反射、又は氾濫を来す事になります、若し川の流路、谿谷或は他の低地を犠牲にして、之を緩衝地区とし、津浪が事由に侵入するようにすれば隣接地の浪害を軽減する事が出来ます。

船舶や木材が浪と共に上陸突進する時は被害が著しく増加しますが、それ等が緩衝地区へ導入されれば被害を著しく減する事が出来ます、申す迄もなく緩衝地区には住宅、学校、役場等を設けない事であります。

#### (ヘ) 避難道路

住宅地から安全な高地へ直接通ずる道路が必要であります、之が無い為に多数の死者を出した例は、昭和二十一年の熊野錦浦があります。道路系統の複雑な為に沢山の流死者を出したのは、宝永四年及び安政元年の津浪の際に於ける尾鷲があります、安政の時には百九十四人の流死いたしました、二木島の如きは之れ以外に予防施設はないようであります。

#### (3) 地震知識の普及

地震の予知も必要、耐震建築も大切ですが、地震の知識が一般に普及されることは何よりも重要です、日本は世界一の地震國震災國であるにも拘らず、大多数の日本人の地震に関する知識は極めて貧弱であります。右の「大多数の日本人」の中には政治家や教育者も入ります。とりわけ自分の郷土の過去の震災浪災については充分の知識を持たねばなりません。それが震災労災予防の根底であります。昭和八年三陸津浪の直後、同地方の小学校を歴訪して津浪についてどの程度の知識を児童に授けて居るかを尋ねたところ、校長の返事は例外も無く“ノー”であった。そしてその理由は教科書に書いてないからと云うのであります。私（武者）は長嘆息せざるを得なかったのです。其後、熊野沿岸を訪れ、或る村では小学校の位置を早く移転するよう勧告しましたが、其の勧告は容れられなかった。或る部落の老人達からは津波の惧のない土地へご苦労様にも東京から調査に来たと云って大いに嘲笑され、また或る村役場の吏員はこの地に津波の心配なしと平気な顔をして居ました。また或る町では、校庭に宝永津浪流死者の塚があるにも拘らず、毎年津浪の記念日に其の塚のほとりで訓話を試みて居る様子はありませんでした。これも教科書に書いていないからでしょう。私は再び長嘆息せざるを得なかったのであります。

昭和の津浪に被害を要するに、一般の人々が地震や津波に対する知識の欠いていた事が多くの死者を出した原因であろう。紀州近海に発生する大地震は続発性のあると

いう事を知って居れば、同じ場所で二回目の浪の被害を受けずに済んだのであります。

津浪の経験がない為に、波はいくら大きいと云った所で、御浜海岸にうちよせる土用浪位であろう、木本の子供等はあんな土用浪でさへ泳いでいるのだから泳げるに違いない、泳いで居れば其のうち助かるのは必定だ、高い浪が来たとして箆の上へあげて置けば済むだろう位の安い考えをもったのが失敗（文字切れ認識不能（と感じました？））

殊に今度の地震よりも強震だった明治三十二年の地震でさへ、津浪の襲来が無かったのだから定めし今度も津浪は来ないなどと、津浪は地震の強弱と合致するものではないという事も知らずに、早合点した事も其の一つでありました。

津浪に背を見せるなという諺の通り、浪の速さにはどうしても勝てないのも知らずに走って命を失ったり、浪の周期がどれ程かを考えず、家の中に入るのに見張りもつけなかったというのも、今になって思えば残念です。

三兵衛屋の処迄潮がひけば津浪が来ると言い伝えている古人の言をおろそかに、何の気も止めずに呑気に暮らして居たのです。記録や口碑の重要なことも考え直す必要があります。

佐々博士も、まあ、大体百年位は地震や津浪はないと考えてよいが、又百年目に同じ場所に、大きな地震や津浪が来るに極まっている、然し此の辺は三陸のように三十米にも及ぶ事は一度もなく、大抵四米乃至六七米位のものであるから、一寸津浪よけの施設を考えればもう永久に津浪の恐れもなくなるのであるが、健康な日本人は直ぐ津浪の害を忘れてしまって、次の地震や津浪の被害から避れる処置を取らないで困ると行って居られます。

最後に大地震、津浪の場合の心得を述べましょう。

#### D. 災 害 時 の 心 得

##### (1) 地 震 の 場 合

(イ) 広場があったら直ぐ飛び出せ、但し火の用心は忘れるな。

地震は始めゴトゴトと小さく揺れ、次にユサユサと大揺れになります、初めの小さい地震を初期微動といいます、大地震の場合には、初めから相当な揺れ方をします、斯様な時広場が近くにあれば、直ぐ避難するがよい、然し外に出るときには火を消す事を忘れてはなりません。

(ロ) 室内に止るなら堅牢な家具の下に身を寄せよ。

大地震になると、揺れ方が初めから大揺れになるまでに一二秒の事さへあって、外に出られぬ場合もあります、斯うして室内に居なければならぬ場合には、堅牢な家具の下へもぐるがよい、そうすれば桁や梁などで押し潰される事はありません。

(ハ) 二階にいたら下へ降りるな。

一階が潰れても二階が其の俛残る事が多いものです。福井の地震で葦原町の二階建て五十棟の内、一階だけ潰れたものは四十棟、二階の潰れたものは一棟もありませんでした、愛知懸海部群一色辺では、階下にいても地震が揺れ出すと二階へ逃げるそうです。

(ニ) 石垣や石燈籠に近よるな、屋根瓦に注意せよ

屋根瓦の墜落は危険ですから、避難の際には、防空頭巾か坐蒲団を被っているとよろしい、熊野の様な石垣の多い処では、石垣の傍に寄らない様にせねばなりません。遊木浦などに見受ける段畑の土止めの石塊は実に困ったもので、地震の時に避難が困難でしょう

(ホ) 人を救うより火を消せ

地震の被害より実は火災による被害の方が怖ろしいのであります、木造建築は倒れても梁等で押えられぬ限り滅多に死ぬものでもありません。明治二十四年濃尾地震の調査によりますと、最も被害の多かった処でも十戸に就て一人の死者を出した割合であります、出火がある甚だしい場合には一戸につき一人の死者を出す事があります。大正十二年の関東地震でも、東京に於ける圧死者約二千人でしたが、大火となったために死者六万人に及びました。出火があったら何を於いても消化に力めなければなりません、大正十四年但馬大地震の時、震源の殆ど真上にあった田結（タイ）という部落では、八十三戸の内八十二戸が倒壊して六十五人が下敷きとなりましたが、部落の人たちは人を救うより先ず火を消せと行って、三ヶ所に起こった火を消し止めて置いてから、下敷きになった人を助けたので、即死者を除いて全部無事に救い出す事が出来ました。

(ヘ) 直ぐ水を貯えよ。

地震が揺ったら直ぐに火を消してから、あらゆる器物に水を汲み入れて、出火に備えねばなりません。

(ト) 余震を怖れるな。

大地震の後に必ず余震が発生しますが、余震は本震に比べると小さいのですから、怖がる必要はありません然し本震で大破した家は余震で潰れる場合があります、又東海道南海道沖の地震は二ヶ所から続いて起こる習性がある事は前に申しましたが、一回地震があった場合、二回目の地震があるまでは油断はなりません。

(2) 津 浪 の 場 合

紀州熊野地方のような津浪の常習地では、地震があったら直ぐに海の状況に注意せねばなりません、但し一二時間たっても津浪が来なければもう大丈夫です。

津浪の襲来する回数は、一定していませんが、家を浚はれるような浪は初め

の数回だけで其の後は所謂強穹の末で恐るるには及びません、然し新たに海底に変化が起こればそれは別問題です。

津浪は或る周期をおいて間歇的に来るのでありますから、あまり欲張りすぎて命を失う事があります、家へ帰る時には見張りをつけておかねばなりません、然し近くに高い土地が無い場合には、絶対に帰ってはなりません。

津浪の速さは海の深さと、海底の地形や湾の形状等によって、著しく違ふのであります。三陸の沿岸のように深さ数千米もある沖合では非常に速くて、アメリカの西岸まで十時間二十分で達するといわれます。大体一秒間に三百米の速さです。浪が近くに迫った場合には、出来るだけ最短距離を取らねばなりません、廻り道をして避難した例は、今度の津浪に於いてもあった様です。

兎に角、早く一尺でも高い処へ避ける様にせねばなりません。

## 八 結 び

地震、津浪に関する無知無関心のために貴重なる多くの人命を失い、莫大な損害を蒙ったことは、返す返す残念である。ただ些か心を慰められることは、当時は戦争の最中で、隣組制度が完備していた事とて、僅か一時間か二時間で罹災者への配給品を渡すことの出来たことでこれは非常に好結果であった、罹災者の欲求したものは、食糧よりも衣料であったとは、後日の懐旧談である。

口碑や記録の尊いものであり、被害を少なくする事の出来る貴重なものである事を我々は痛感した、然し年が経つにつれて、彼の恐ろしい津浪の体験をしなかった次の世代の人々は忘れてしまつて、再び繰返すような事があつてはならぬ、五年目か七年目かに、震災記念会を開いて津浪に対する対策を語り伝え次に来るべき津浪の被害から逃れさせる様にするのが、子孫への吾々祖先の責務であらう。

---

九 は 病 五 七 の 雨 に 四 つ ひ で り  
六 つ 八 つ 時 は 風 と 知 る べ し

---

## 付 録

### 大地震津浪之？

宝永三年戌年十月ヨリ十一月迄大門建立其期年ノ亥十月四日午刻大地震津浪ニテ浜通不残流家仕者也、此時流死人十一人有之也

右宝永三年ヨリ弘化四年迄凡百三十三年

嘉永七年寅六月十四日七ツ時大地震殊ニ荒々舗此時猪鹿垣大半崩レ其の後雑木山二ヶ所売右ヲ以猪鹿垣出来此時津浪用夷イタシ申所其後津浪無<sup>して</sup>之所同年十一月四日之朝五ツ半時大地震津浪下乃通り也

- 一、 津高サ宝永ノ津浪ヨリ凡三尺四五寸計ヒクシ
- 一、 浪打苗井調ノ車
- 一、 榎本弥三兵衛手船満屋彦藏屋舗東ノ方ヘツナグ
- 一、 浪榎本貞ニ屋舗迄
- 一、 同人屋舗迄シオ乗り不申
- 一、 稻荷上ノ社殿迄浪乗
- 一、 三折屋不流板シキヨリ
- 一、 壽津古渡所迄浪来ル
- 一、 鉄砲頭大川谷家壺軒茂不残流失ニ相成申
- 一、 田中又五良家舗西ノ道迄
- 一、 浪ハジメヤハラカニシテ治大ニツヨク入来其様荒々舗
- 一、 此タビノ地震一流有初メ動出シ戌亥方ヨリドニラゴトクドンドントナリ来リ夫ヨリ  
家々コク江来ル者也

嘉田村家数百六十一軒                      此人数八百廿五人  
津浪流家七十三軒                          此人数三百五十人                      半浪二軒有之

流死人名前

一、 六十四才	庄兵衛	一、 三十五才	山伏桂重
一、 五十八才	定 七	一、 十四歳	仙助伴
一、 九才	仙助伴	一、 四才	和兵衛子

右古文書 賀田 田中又一郎氏所藏 意味不明ノ個所アレド原文の俚抄録ス  
(倉本 為一郎)

著 者 小 傳 ( 自 叙 )

明治二十一年九月十三日、梶賀浦二番屋敷に生れた、明治四十五年三月、三重懸師範学校卒業後、本群賀田、西山、北<sup>〇</sup>桧杖、三<sup>〇</sup>木、三<sup>〇</sup>木里、高岡、北牟婁郡引本、九<sup>〇</sup>木、二<sup>〇</sup>郷、上里各小学校に奉職(〇印校長)して、二十一年間教育界にあった、つとに郷土史研究并に考古学に興味を持ち、紀伊乃熊野に関する古書、古記録を所藏して書架を満たし、多くの考古学的遺物を拾集保存していた。

又平素の研究調査を纏めて、上梓世に発表した冊子も数十種に上がっている、近年『熊野郡書類輯』を編纂、還暦祝いに知己友人に頒布する計画の下に執筆中郷土を襲った津浪の為に、半世を費やした努力も一瞬にして流失、一切空となってしまった。

其にしても、研究的の精神だけは流失を免れたものの如く、其の古株から芽を吹き出して来る『昭和地震誌』編纂も、己から求めて自分で苦勞している、然し一生涯の遺物として社会へ贈るものは唯是だけに過ぎない。

還 曆 偶 感

六 十 餘 年 夢 寐 中 織 身 老 骨 白 頭 翁

何 諺 對 祖 先 靈 位 去 々 来 々 一 切 空

去 思 倉 本 為 一 郎

昭和二十四年一月

印 刷 (膳 寫?)

昭和二十四年十二月七日

發 行

著 作 者

倉 本 為 一 郎

東京都文京區元町一丁目十三番地

印 刷 者

筆 研 社

南 輪 内 村

發 行 所

震 災 記 念 僧 會